

文部科学省学術フロンティア共同研究プロジェクト

「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査」

報 告 書

2007年2月

甲南大学人間科学研究所  
第2期子育て研究会



文部科学省学術フロンティア共同研究プロジェクト  
「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査」報告書

## 目 次

はじめに .....	1
調査の概要 .....	2
第1章 基礎統計	
1 子どもと出産時の状況 .....	3
2 保護者と家族の状況 .....	5
第2章 子育ての状況と子育てをめぐる意識	
1 子育てと自分の生き方について .....	7
2 子育ての悩みとストレス .....	10
3 子育ての相談相手と情報源 .....	11
4 子どもを預けることについて .....	12
5 父親の子育て参加 .....	14
第3章 育児ストレス得点と諸条件との関連	
1 子育て環境との関連 .....	15
2 出産時との関連 .....	15
3 子育て状況や母親の意識との関連 .....	16
4 父親の子育て参加との関連 .....	18
5 まとめ .....	20
第4章 子育ての葛藤場面における解決様式	
1 はじめに .....	21
2 調査方法（投影法）について .....	21
3 場面1（二者関係における葛藤） .....	21
4 場面2（三者関係における葛藤） .....	24
5 『その他』の回答から .....	27
6 まとめ .....	28
第5章 自由記述の分析	
1 はじめに .....	29
2 数量的分析 .....	29
3 記述内容の分類 .....	29
4 具体的な記述の内容 .....	31
5 まとめ .....	35
おわりに 今後の研究に向けて .....	36
資 料（調査質問紙） .....	37
第2期子育て研究会メンバー一覧 .....	46



## はじめに

さまざまな対策が試みられているにもかかわらず、子どもを取り巻く環境は、ますます厳しさを増しています。都市化、少子化、晩婚化、核家族化などにより、子育ての自然な継承が難しくなり、親たちは孤立したなかで不安や多くのストレスを抱えています。子どもと共に自分を育てながら、じっくりと生活を楽しみたいと願っても、それを容易には許さない競争社会や諸制度の壁が立ちまわります。私たちは、健やかな次世代を守り育てるために、相当な意識の変革を必要とする時期に来ているのではないのでしょうか。

甲南大学では、文部科学省学術フロンティア共同研究プロジェクトの一環として、2000年度より「子育て研究会」を組織し、阪神間およびその周辺に在住の乳幼児を育てている母親、父親、祖母を対象とする「子育て環境と子どもに対する意識調査」を実施してきました。ここでは、今日の子どもと家族が置かれている環境や、育児に対する考え方を知り、これからの子育てにはどのような支援が必要かを「現代人の心の危機」という観点から探ってきました。

今回、最初の調査から6年を経過し、その間の変化と、またその後新たに生じてきた状況について知るために、2005年度より人間科学研究所内に組織した「第2期子育て研究会」を主体として、「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査」を実施いたしました。本報告書は、その調査から得られた基礎資料と分析結果を整理し、取りまとめたものです。今後、この内容をさらに詳しく検討し、次世代を育てるための支援へとつなげていきたいと考えています。

調査の実施にあたっては、神戸市東灘区役所保健福祉部子育て支援係、区内の全公立保育所、幼稚園に多大なご協力をいただきました。ここに深謝申し上げます。また、ご回答いただきました各保育所、幼稚園の保護者の皆様、ならびに甲南大学カウンセリングセンター心理臨床カウンセリングルームの子育て支援グループに在籍の保護者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

2007年2月

甲南大学人間科学研究所学術フロンティア「第2期子育て研究会」代表

甲南大学教授 高石 恭子

# 調査の概要

## 1. 調査の目的

0～6歳（就学前）の乳幼児をもつ保護者が、子育てについて、また子どもを育てている自分や配偶者について、どのような意識をもっているかを捉え、第1回と同じ調査項目については経年比較を行う。

## 2. 調査対象

2006年6月現在、神戸市東灘区およびその周辺に在住する乳幼児の子どもをもつ保護者（一部の質問項目は、母親のみを対象）。

## 3. 調査方法

神戸市東灘区の全公立保育所、幼稚園、ならびに甲南大学カウンセリングセンター心理臨床カウンセリングルーム主宰の子育て支援グループに在籍する子どもの保護者に各機関を通して直接配布。各家庭での自記式質問紙調査。回収は郵送による。

## 4. 調査期間

2006年6月～7月

## 5. 回収状況

2000票配布（公立保育所1315、公立幼稚園632、子育て支援グループ53）  
有効回収数 648（有効回収率32.4%）

## 6. 調査項目

子育ての状況 / 子育てについての意識 / 子育ての悩みとストレス / 子育ての社会的資源（相談相手、情報源、預け先） / 子育てをめぐる配偶者への意識 / 子育ての葛藤場面における解決様式

# 第1章 基礎統計

## 1. 子どもと出産時の状況

本調査では、子どもが2人以上の場合、その中から未就学児である子どもを1人選択して回答してもらった。以下の結果は、回答の対象となった子どもについてのものである。

子どもの性別は、「男」が51.1%、「女」が48.8%とほぼ同割合となっている。(図1-1)

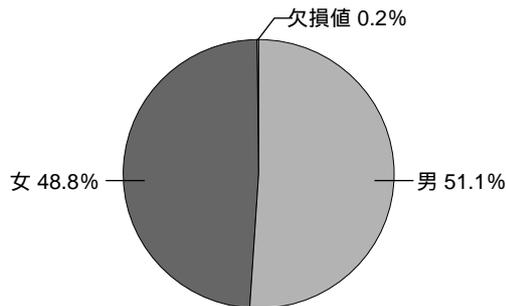


図1-1 子どもの性別

子どもの平均年齢は3.9歳である。

年齢の分布を見ると、「5歳」と「4歳」がほぼ同割合で多く、合わせると全体の65.0%を占めている。(図1-2)

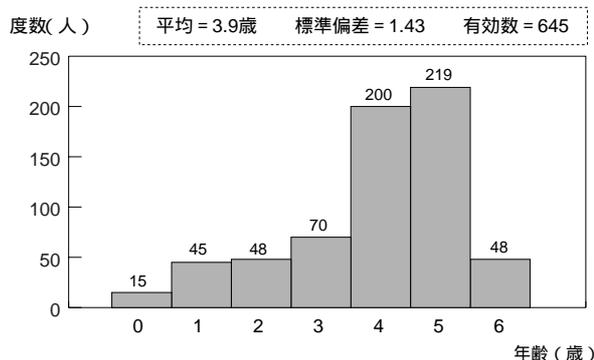


図1-2 子どもの年齢

子どものきょうだい数の平均は1.9人であった。

きょうだい数で最も多いのは「2人」きょうだいで、全体の5割強を占めている。次いで、「1人」(いわゆる一人っ子)が約3割を占め、「3人以上」きょうだいのいる割合は15.2%と少ない。

子どものきょうだい数と出生順位をみると、「1人中1人目」と「2人きょうだい中2人目」とがそれぞれ約3割と最も多く、次いで「2人きょうだい中1人目」(25.2%)となっている。きょうだい数に関係なく、第一子が占める割合は全体の57.4%であった。

(図1-3)

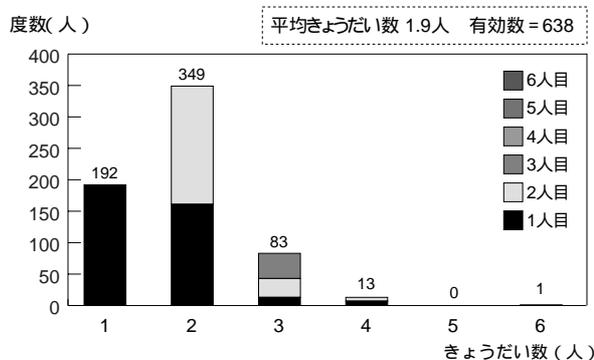


図1-3 きょうだい数と出生順位

子どもが日中、おもに過ごす場所は、「保育所」が49.1%、「幼稚園」が47.7%でほぼ同じぐらいの割合である。本調査用紙の配布先の多くが保育所および幼稚園となっている関係で、概ね就園児に関する回答が得られている。

(図1-4)

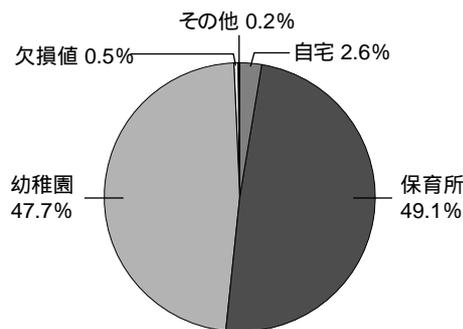


図1-4 子どもが日中、おもに過ごす場所

妊娠中および出産時の問題は、「なかった」が約8割である。

「あった」と回答した者のうち、最も多かったのは「母体の問題」(10.2%)で、これには切迫流・早産、早産、妊娠中毒症等が含まれている。「不明」(2.9%)は、母体の問題か胎児・新生児の問題か区別のできないもの、「その他」(0.8%)には妊娠中のストレス、医療ミス等が含まれている。(図1 5)

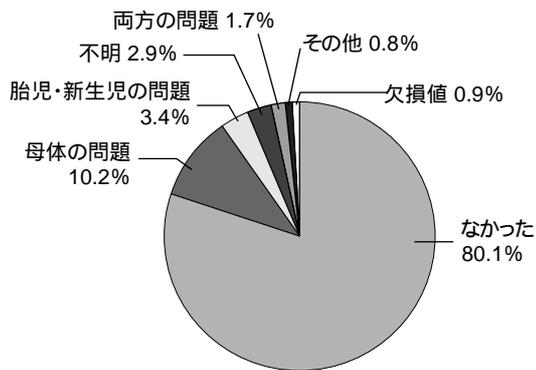


図1-5 妊娠中および出産時の問題

出産の時期は、9割弱が「正期産」であった。次いで、「過期産」(6.5%)、「早産」(3.5%)となっている。(図1 6)

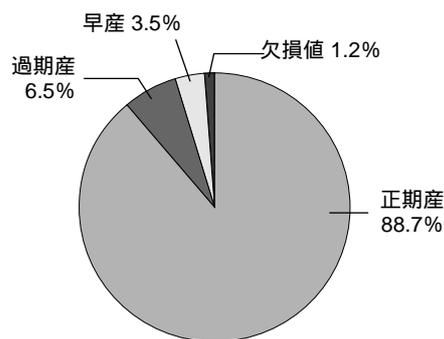


図1-6 出産の時期

出産施設をみると、「産婦人科医院」が58.6%と最も多く、次いで「総合病院」が37.7%を占めている。(図1 7)

これを第1回調査時(2000年)の結果(「産婦人科医院」が54.9%、「総合病院」が42.0%)と比較すると、「産婦人科医院」で出産する割合が少し高くなっている。

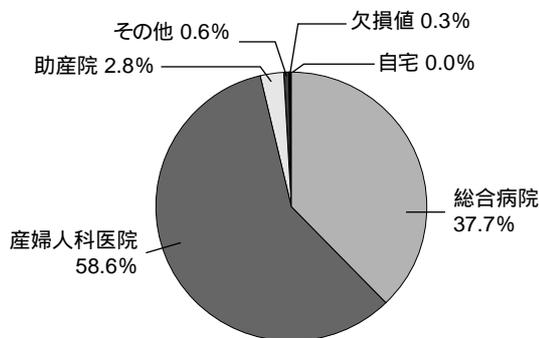


図1-7 出産施設

出産形態については、「普通分娩」が76.4%、「帝王切開」が15.0%、「吸引・鉗子分娩」が6.8%となっている。(図1 8)

第1回調査時(2000年)の結果(「普通分娩」が80.5%、「帝王切開」が10.9%)と比べると、「普通分娩」の割合が若干減少し、「帝王切開」の割合がやや増加している。「吸引・鉗子分娩」と「無痛分娩」の割合は同じであった。

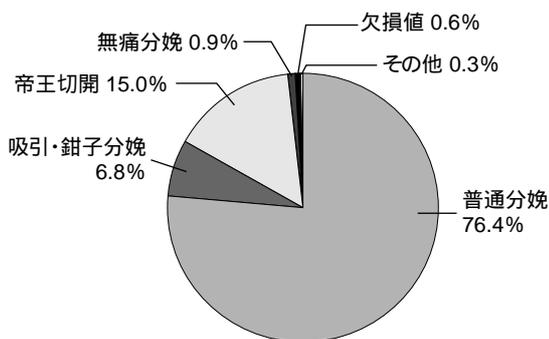


図1-8 出産形態

出産時における父親の立会いの有無をみると、「あった」が49.7%、「なかった」が同じく49.7%となっており、それぞれ半数ずつを占めている。(図1 9)

第1回調査時(2000年)の結果(「あった」が33.1%、「なかった」が66.9%)と比較すると、父親の立会いは増えていると言える。

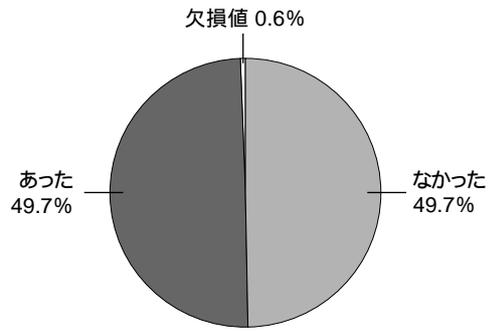


図1-9 出産時における父親立会い

出産後の母子同室の開始時期をみると、「退院まで別室」が最も多く33.5%を占めており、次いで「1日後から」(27.8%)、「出産直後から」(19.9%)、「2日以上後から」(17.7%)となっている。「出産直後から」と「1日後から」を合わせると全体の約5割となっている。(図1 10)

これを第1回調査時(2000年)の結果(「退院まで別室」が48.9%、「出産直後から」が14.3%、「1日後から」が22.6%)と比較してみると、出産後の母子同室時期は早くなっていることがわかる。

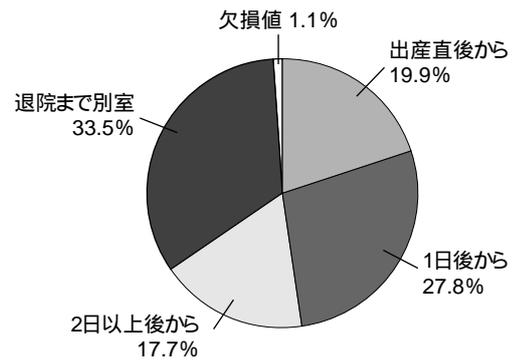


図1-10 出産後の母子同室開始時期

## 2. 保護者と家族の状況

回答者である親の平均年齢は34.9歳である。

「30歳以上35歳未満」と「35歳以上40歳未満」がほぼ同程度で多く、合わせると全体の約8割を占めている。次いで「40歳以上45歳未満」(12.5%)、「25歳以上30歳未満」(8.1%)の順になっている。(図1 11)

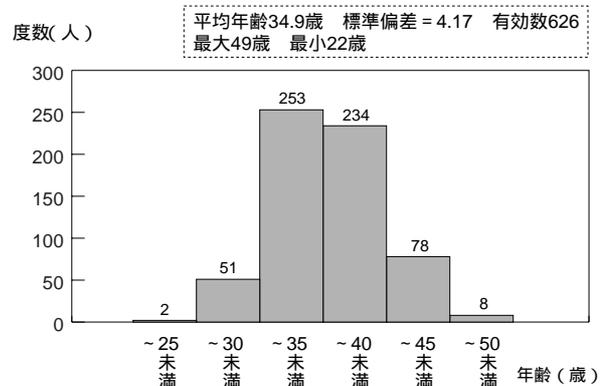


図1-11 親(回答者)の年齢

回答者は、ほぼ「母親」(99.1%)である。(図1 12)

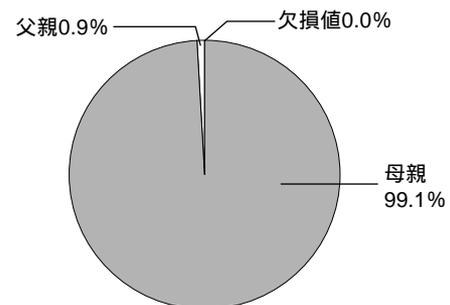


図1-12 回答者(子どもとの続柄)

現在の母親の職業は、「専業主婦」が46.8%、「常勤」「パート・アルバイト」「自営」を合わせた就業している割合が51.7%である。

また、就業している母親のうち、最も多いのは「常勤」で30.4%、次いで「パート・アルバイト」(17.9%)、「自営」(3.4%)であった。「その他」には育児休業中や学生等が含まれている。(図1 13)

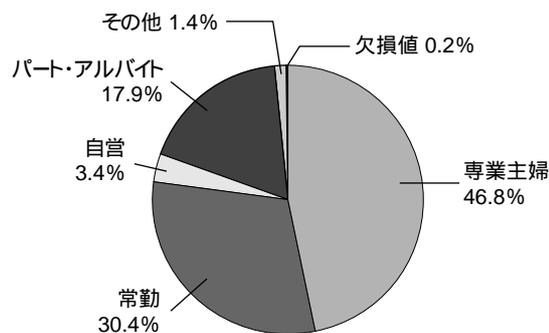


図1-13 母親の職業（現在）

回答の対象となっている子どもを出産する1年前の母親の職業について聞いたところ、「専業主婦」が31.6%、「常勤」「パート・アルバイト」「自営」いずれかの形態で就業していた割合が66.0%となっており、就業者は「専業主婦」の約2倍であったことがわかる。これを図1 13で示した現在の母親の職業と比較すると、「専業主婦」の割合が出産1年前より15.2%増えている。

また、出産1年前の就業者の内訳は、「常勤」が最も多く42.7%、次いで「パート・アルバイト」(20.2%)、「自営」(3.1%)となっている。この内訳を現在の母親の職業と比較すると、「パート・アルバイト」および「自営」の割合はほぼ変動がなく、現在の「常勤」の割合は出産1年前の「常勤」の割合と比べて12.3%少なくなっていることがわかる。(図1 14)

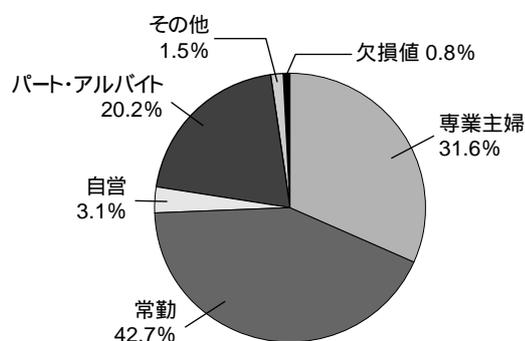


図1-14 母親の職業（出産1年前）

家族構成は、「核家族」が全体の88.3%を占めている。「核家族」以外では、祖父母（両方/いずれか一方を含む）と同居する「拡大家族（祖父母のみ）」が最も多く、5.2%であった。また、母子のみで生活する「母子家族」は2.3%、母子家族に祖父母などの親族が同居する「母親+祖父母など」が2.2%、「父子家族」が0.8%であった。(図1 15)

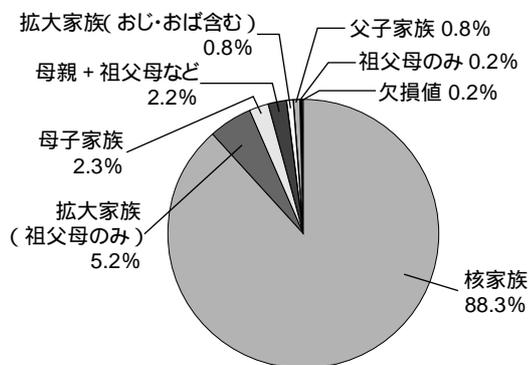


図1-15 家族構成

## 第2章 子育ての状況と子育てをめぐる意識

### 1. 子育てと自分の生き方について

図2-1は、子育てをめぐる回答者の意識について、全18の質問項目に4件法で回答してもらった結果である。

#### (1) 子育てへの気持ちについて

項目1)、2)、7)は、“子育てが楽しい”、“子どもの成長をみるのが嬉しい”といった気持ちを問う質問であるが、これら全ての項目において、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と答えた人は、回答者の大部分を占めており、それぞれ89.7%、99.2%、99.1%であった。また、項目5)、16)より、子育てを通して“自分の世界や視野が広がった”“自分も成長してい

きたい”と感じている人は、それぞれ92.3%、97.8%であった。一方、項目4)の“子育てに向いていない”という問いに、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と答えた人は全体の34.1%、項目11)の“良い親であろうと無理をしている”と思う人は21.0%であった。

これらの結果から、回答者の多くは子育てを楽しみ、子育てを通じて自分自身も成長している、成長していきたいと、子育てについて肯定的な感情を抱いていると言えるが、そうした感情を抱きつつも、その一方で、自分は子育てに向いていない、無理をしていると感じている人も少なからずいるということが考えられる。

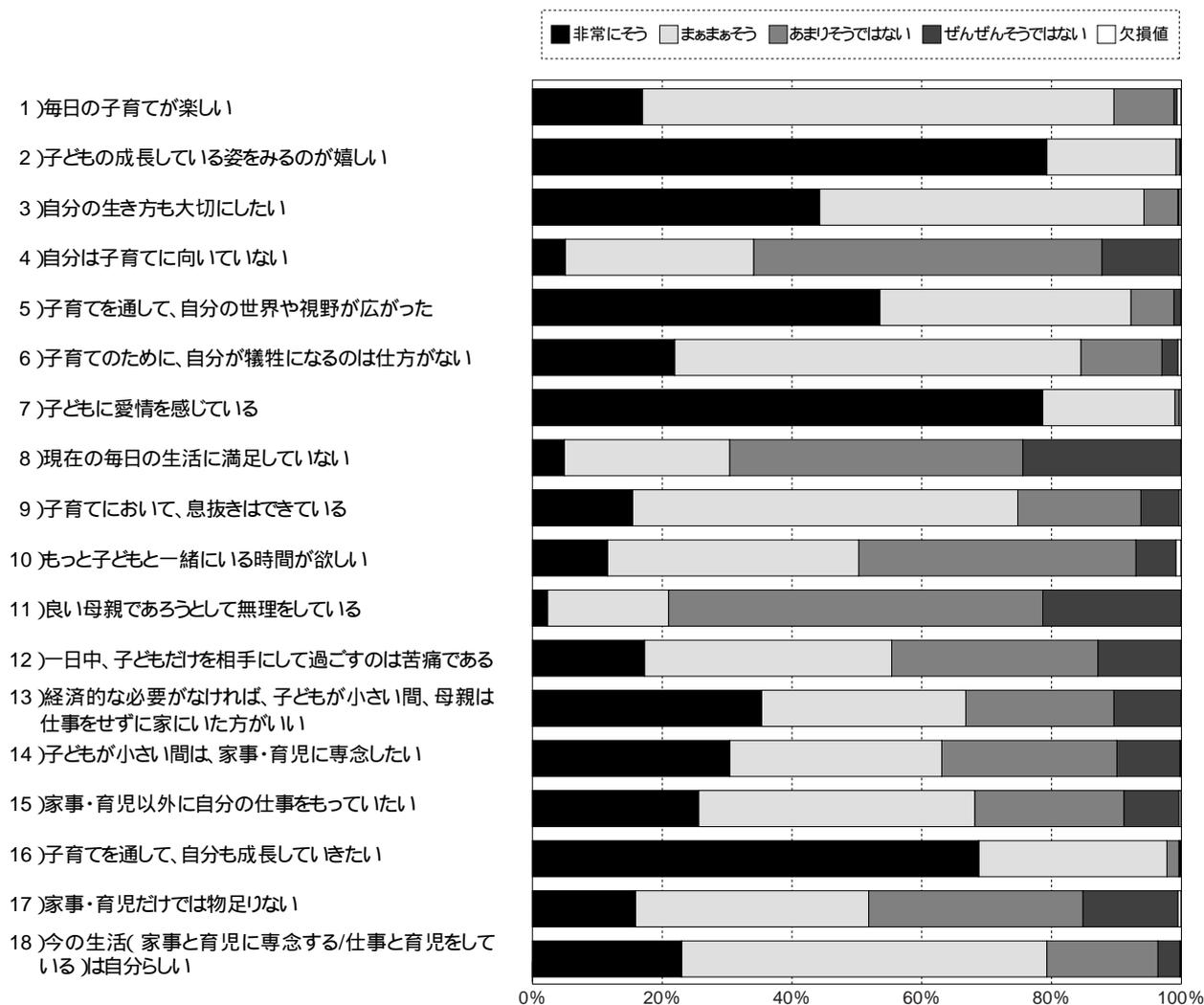


図2-1 子育てをめぐる意識

(2) 自分自身の生き方と現在の生活への満足度について  
 項目3) 6) 15) 17) は、親自身の生き方についての質問である。“自分の生き方も大切にしたい”では94.3%、“子育てのために、自分が犠牲になるのは仕方がない”では84.6%の人が、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と回答していた。また、“自分の生き方も大切にしたい”と答えた人のなかで、“子育てのために自分が犠牲になるのは仕方がない”とも答えている人は、全体の79.5%であった。また、“家事・育児以外に自分の仕事を持っていたい”では68.2%、“家事・育児だけでは物足りない”では51.9%の人が、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と回答していた。

項目13) 14) は、子どもが小さい間の自分の生き方について尋ねている。“経済的な必要がなければ、仕事をせずに家にいた方がいい”と思う人は全体の66.8%、“小さい間は家事・育児に専念したい”と思う人は63.1%であった。

現在の生活にどれくらい満足しているかについては、項目8) 18) より、“毎日の生活に満足していない”と思う人は30.4%、“今の生活(家事と育児に専念する/仕事と育児をしてい

る)は自分らしい”と思う人は79.3%という結果が得られ、“現在の生活に満足しておらず、自分らしくない”と思っている人は全体の20.5%であった。

上記の結果から、回答者の約2/3が、“子どもが小さい間は家事・育児に専念した方がいい、専念したい”という価値観や思いを持っており、他方では、“家事・育児だけでは物足りない”“自分の仕事を持っていたい”と思っている人も過半数を超えていることがわかった。これらは、現代に生きる親たち(特に母親)が、“親として”また“個人として”の生き方に様々な葛藤を抱えながら子育てをしていることを示唆するものと言える。

### (3) 母親の就労状況と子育て意識について

子育て生活の現状について、項目9)の“子育てにおいて、息抜きはできている”と感じている人は74.8%であった。これを母親の就労形態別(「専業主婦」「常勤」)で比較すると、“息抜きできている”と感じている人は、それぞれ73.8%、75.5%であり、結果に差はみられなかった。

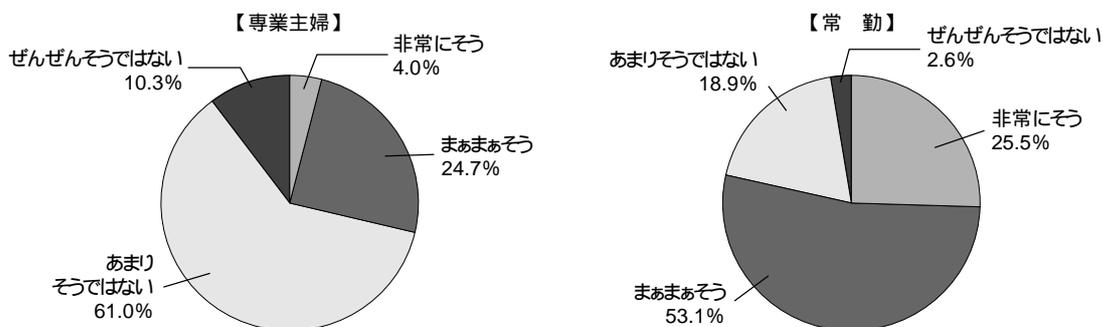


図2-2 もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい

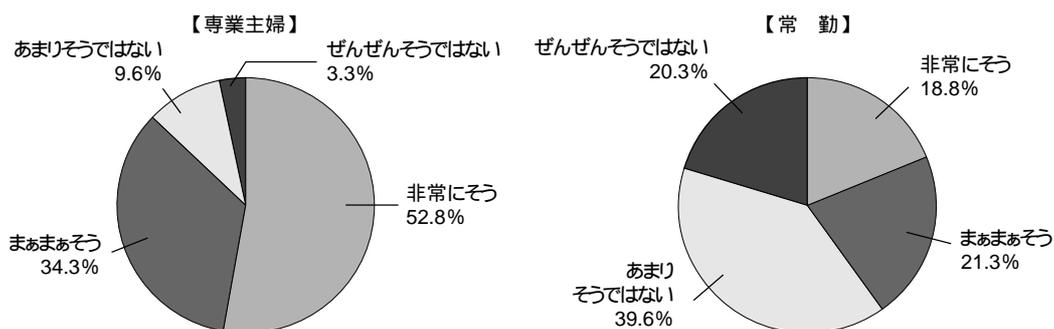


図2-3 経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事せずに家にいた方がいい

項目10)の“もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい”という質問について、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と答えた人は、「専業主婦」28.7%、「常勤」78.6%であり(図2-2参照)「常勤」の方が子どもと一緒にいる時間をより求めていることがわかった[専業主婦:平均2.2(SD=0.68),常勤:平均3.0(SD=0.74), $t=-12.2, p<0.01$ ]これは「常勤」の方が、日頃子どもと一緒に過ごす時間が物理的に少ないため、子どもと接する時間を求めているのだらうと思われる。

一方、項目12)の“一日中子どもだけを相手にして過ごすのは苦痛である”と思う人の割合は、「専業主婦」51.5%、「常勤」57.4%であり、結果に差はみられなかった。

子どもが小さい間の自分の生き方について、13)、14)の回答を就労形態別でみると(図2-3、図2-4参照)“経済的な必要がなければ、仕事をせずに家にいた方がいい”と思う割合は、「専業主婦」で87.1%、「常勤」で40.1%であり[専業主婦:平均1.6(SD=0.79),常勤:平均2.6(SD=1.01), $t=-11.5, p<0.01$ ]“子どもが小さい間は家事・育児に専念したい”と思う割合

は、「専業主婦」で87.5%、「常勤」で36.2%[専業主婦:平均1.6(SD=0.73),常勤:平均2.7(SD=0.88), $t=-14.7, p<0.01$ ]という結果が得られた。

また図2-5に示すように、項目15)の“家事・育児以外に自分の仕事を持っていたい”と思う割合は、「専業主婦」で46.8%、「常勤」で90.3%であった[専業主婦:平均2.6(SD=0.87),常勤:平均1.7(SD=0.69), $t=12.9, p<0.01$ ]これらの結果は、「専業主婦」の方が、“子どもが小さい間は家事・育児に専念した方がいい、専念したい”とより思っていることを示しており、現在の就労状態は、そうした各々の価値観や気持ちを反映しているものと思われる。

項目18)の“今の生活(家事と育児に専念する/仕事と育児をしている)は自分らしい”と思う割合は、図2-6に示すように、「専業主婦」で71.7%、「常勤」で89.8%であり[専業主婦:平均2.8(SD=0.77),常勤:平均3.2(SD=0.64), $t=-5.26, p<0.01$ ]「常勤」の方が、“今の生活を自分らしい”とより思っていることが考えられる。

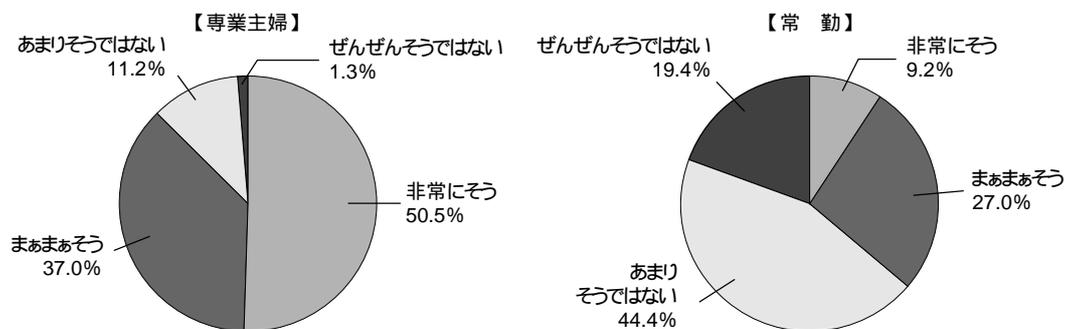


図2-4 子どもが小さい間は、家事・育児に専念したい

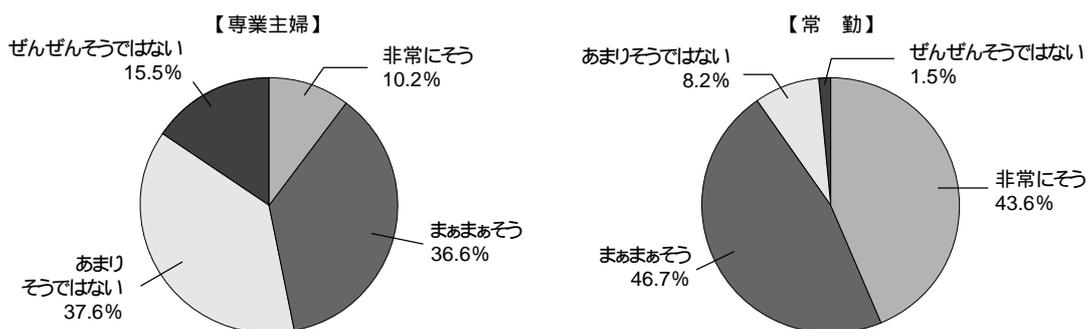


図2-5 家事・育児以外に自分の仕事を持っていたい

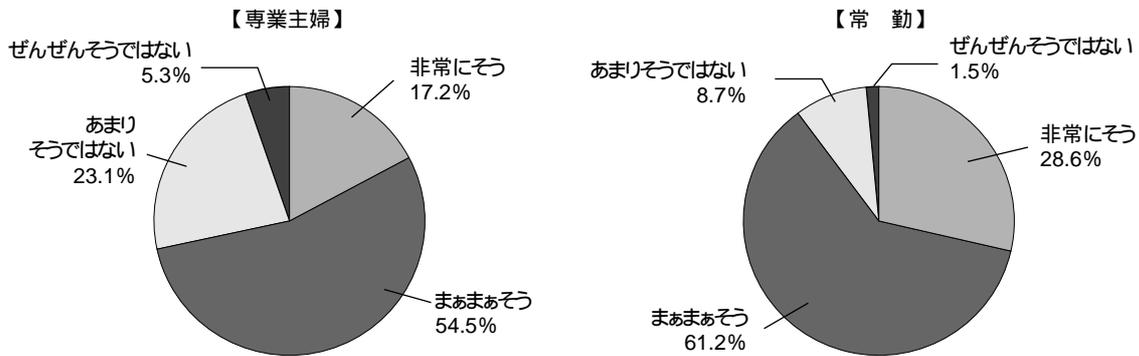


図2-6 今の生活（家事と育児に専念する / 仕事と育児をしている）は自分らしい

## 2. 子育ての悩みとストレス

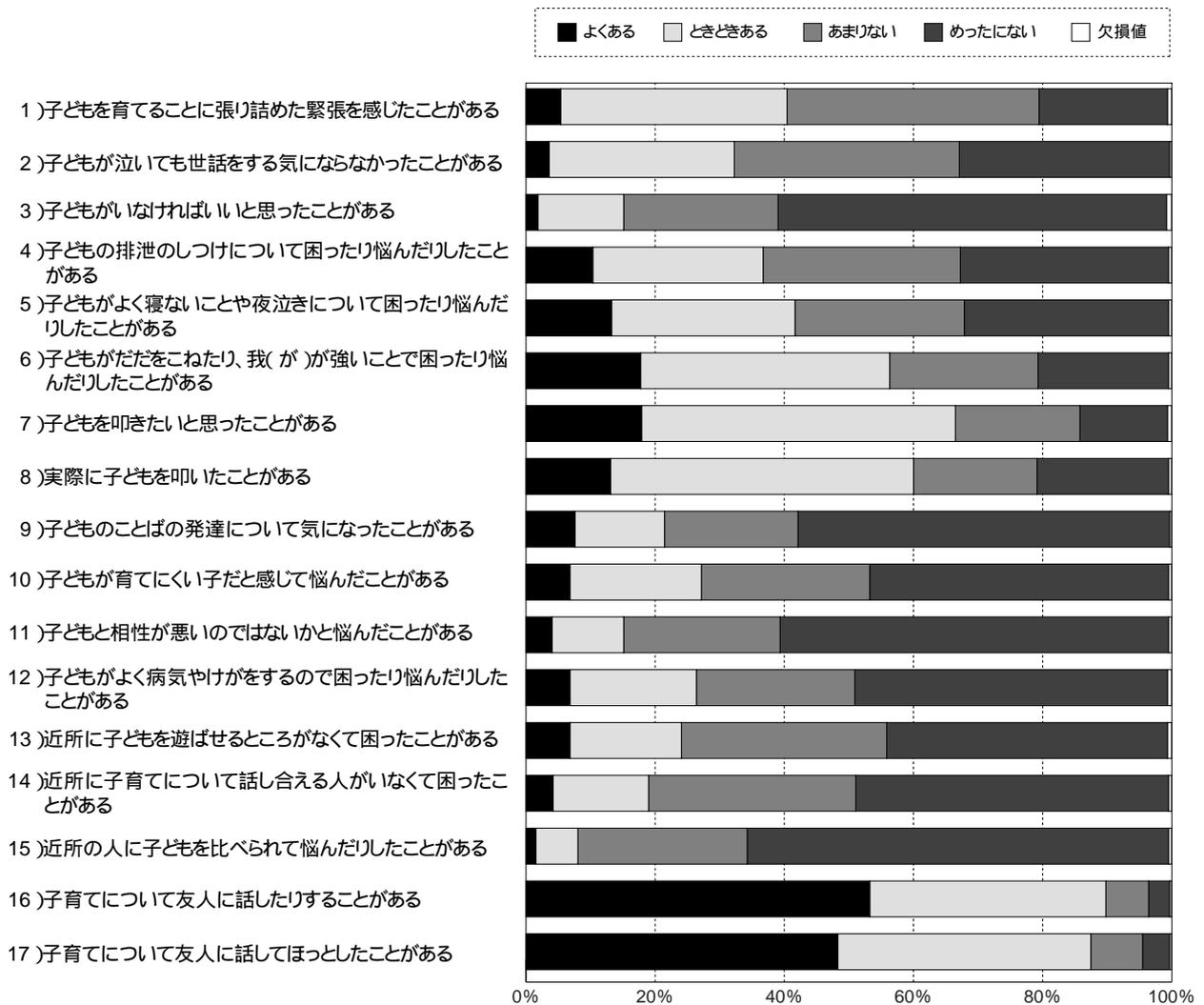


図2-7 子育ての悩みや状況について

図2-7は、母親が普段の子育ての中で、どんな悩みを抱えているのか、どんな状況にあるのかについて、全17の質問項目に4件法で回答してもらった結果である。第1回の「子育て環境と子どもに対する意識調査」の中から、子育て

に関する悩みや困難の体験に関わるもの、友人との関係について尋ねているものをそのまま引き続いて尋ねた。

結果は、全体的特徴は前回とほとんど変わっていない。子どもが泣く時、排泄のしつけなど、

具体的な局面で困惑した経験については、「よくある」は少なく、「ときどきある」「あまりない」「めったにない」の間で回答が分かれている。子どもを叩きたいと思ったこと、実際に叩いたことについては、「ときどきある」が最も多く、「よくある」と合わせると60%を超えており、この数値も前回と変わっていない。

結果が大きく違った項目は、「子どもを育てることに張り詰めた緊張を感じたことがありますか」という項目で、前回の調査では、「よくある」「ときどきある」を合わせると61.1%に達したのに対し、今回の調査では「よくある」「ときどきある」を合わせて40.4%であった。

子育てに関わる個々の悩みや困難があることは前回から変化がないと考えられるが、子育て全体に関わる緊張感は、やや緩和しているの

はないかと考えられる。要因として、インターネットの普及などで子育ての情報が増えたことや子育て支援の広がりによって、母親の閉塞感が少なくなった可能性が考えられる。

前回の調査と同様に、1)から15)までの項目の値を合計し「育児ストレス得点」とした。その際、分かりやすいように「よくある」～「めったにない」の順に4、3、2、1の点数を与え、合計得点が高い方が育児ストレスが高くなるようにした。育児ストレス得点の最小値は15、最大値は53、平均値は30.1であった。前回の調査では最小値は15、最大値は59、平均値は30.9であった。前回と比較すると、育児ストレス得点の非常に高い人がやや少なくなり、平均値も若干低くなっている。

### 3. 子育ての相談相手と情報源

本章の3～5については、母親のみに回答してもらった結果である。

まず、子育てについての不安を話せる相手がいるかどうかについては、「いる」と答えた人が98.3%であり、ほとんどの人が話せる相手をもっていた(図2-8)。誰に話すかについて、「いる」と答えた637人に複数選択回答してもらった結果、「配偶者」「自分の両親」「子育てを通じて知り合った友人」が上位を占め、身近な家族や友人に話すことで支えられている状況がうかがえる(図2-9)。また、相対的に度数は少ないものの、「きょうだい」を選んだ母親が37.8%いることは注目に値する。同世代を生きる者として、きょうだいの存在は、子育ての不安を共有できる貴重な資源であると言える。

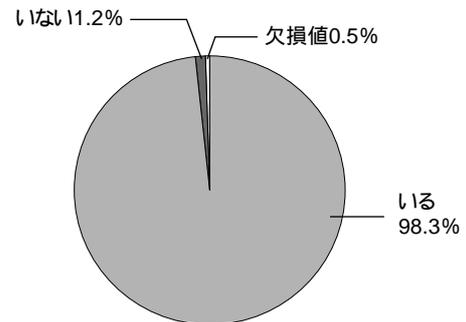


図2-8 子育ての不安の話し相手

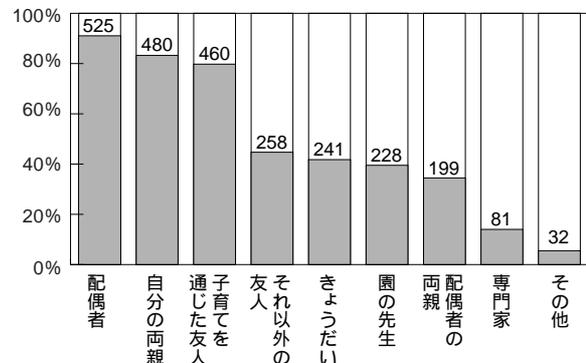


図2-9 不安について話す相手(複数回答、637人中)

次に、子育てに際して必要な情報を得たいとき、何が頼りになるかを3つまで選択回答してもらった結果を図2-10に示す。「自分の母親」「友人」「出産・育児雑誌」が上位3つを占め、今日の子育てにおいて、最新の情報や流行を知ることのできる定期刊行雑誌は、活字情報の中で最も母親の頼りにされていることがわかる。

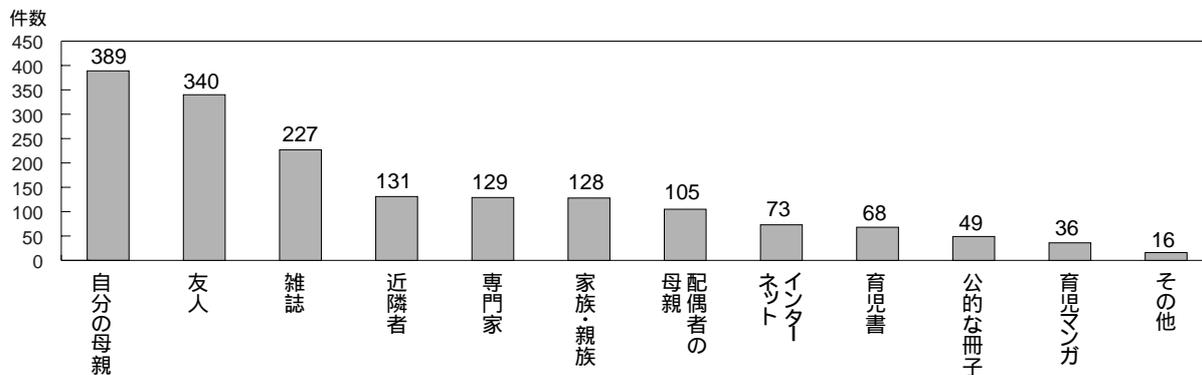


図2-10 子育ての主な情報源（3つまで複数回答）

さらに、頼りになった情報源のうち、選択肢～（活字媒体と「その他」）の中で、具体的に思い出せるものを記述してもらった（複数記述あり）。図2-11はその内訳を、子どもの保育状況別に分類した結果である。記述総数は267件。その中で、ある企業の刊行する「出産・育児雑誌」が105件、同じ社の運営するインターネット・サイトが16件と、上位2つを占めたことは、現代の消費社会と子育ての密接な関係を示唆するものと言える。また、相対的に幼稚園児の母親は、保育所児の母親より、「専門家の書いた育児書（啓蒙書を含む）」を多く挙げている。

なお、この選択項目の中に「配偶者」は用意されていなかったが、「その他」でも配偶者（夫）を答えた母親は3人しかいなかった。つまり、話し相手としては重要であるが、乳幼児の子育てに必要な知識や情報を求める相手としてはあまり頼りにされていないという現状もうかがえる。

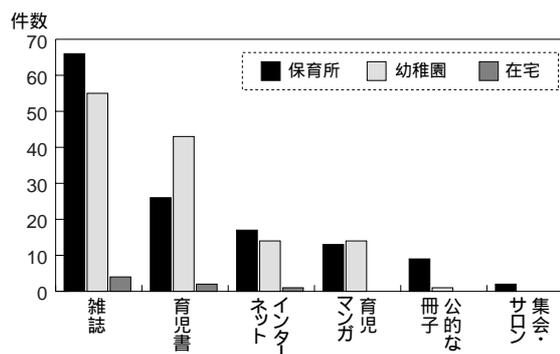


図2-11 保育状況別子育ての主な情報源（活字媒体とその他）

#### 4. 子どもを預けることについて

通常の通所通園以外で、子どもを預けたいと思うことがあるかどうかについては、63.3%が「はい」と答えている（図2-12）。次に、どのようなところに預けるかを尋ねたところ、欠損値を除いた622人のうち、10%（62人）は「預けるところがない」と答えた。それ以外の90%の人が預け先として複数選択回答した結果が図

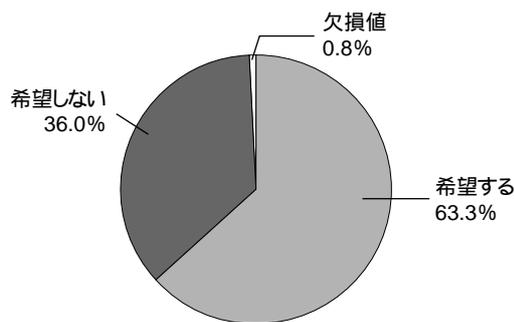


図2-12 通常の通所通園以外で子どもを預けたいか

2 13である。自分の実家が最も多く、次いで延長保育の利用、配偶者の実家となっている。「その他」の主な内容は、祖父母やきょうだい宅、自宅（同居親族）、ファミリーサポート、等が挙げられていた。「友人」や「近隣の知人」といった回答は相対的に少なく、地域での預け合いはあまり行われていない現状を示唆している。

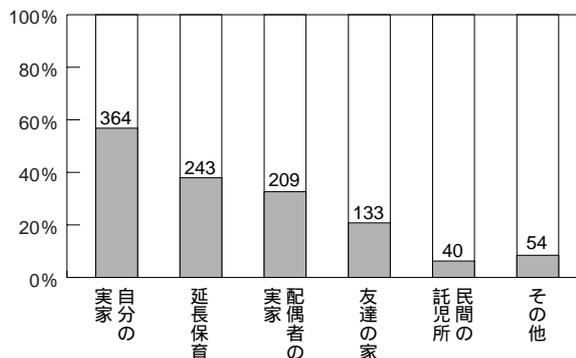


図2-13 通常以外で預ける場所（複数回答、622人中）

また、実際どのようなときに預けるかを複数選択回答してもらった結果を図2 14に示す。36.6%の母親は、仕事や通院など生活上必要な用事するとき以外の、「自分がリフレッシュするための時間をもつため」に子どもを預けているが、これを多いと考えるか、少ないと考えるかは難しいところであろう。「その他」の内容としては、冠婚葬祭、引越、病気、勉強など「母親の都合」によるもの、子どものきょうだいの用事や祖父母の病気など「家族の都合」によるもの、「子ども自身の都合」(自分で希望する等)によるものなどが含まれる。

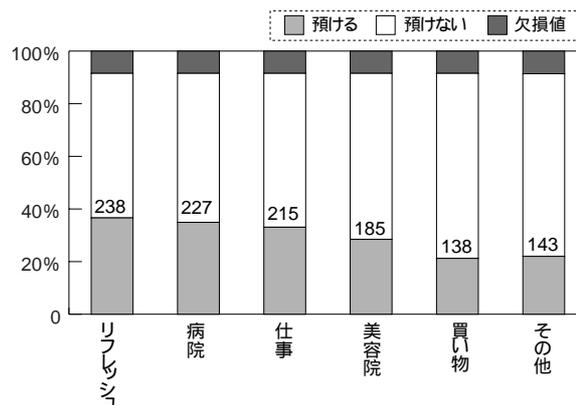


図2-14 どのようなときに預けるか(複数回答、622人中)

預けることにためらいがあるかについては、「はい」と答えた母親が36.1%であった(図2 15)。その場合、ためらう理由を選択回答してもらった結果が、図2 16である。欠損値を除いた223人中、最も多かったのは「子どものことが心配だから」(37.7%)である。「安心して預けられる場所がないから」という理由を選択した母親は8.5%にとどまり、預けることをためらう母親は、保育施設がかりに拡充されても、心理的な理由から預けない可能性が高いことを示唆している。「その他」の内容でも、「(預ける相手に)迷惑をかけたくないから」「非難される気がするから」といった理由が上位を占め、心理的に子どもを預けにくい子育て環境が背景にあることをうかがわせる。

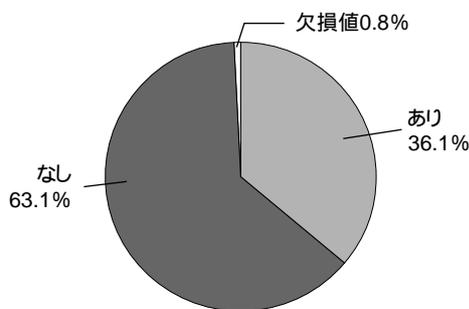


図2-15 子どもを預けることへのためらい

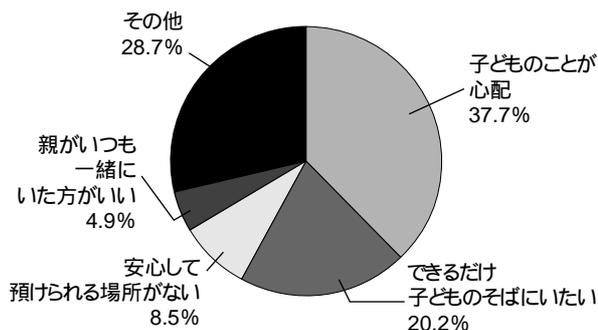


図2-16 預けることをためらう理由（223人中）

## 5 . 父親の子育て参加

図2 17は普段の生活の中で父親が子どもや母親との関係においてどのように子育て参加をしているかについて、母親に尋ねた結果である。「子育てに協力的である」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると77.5%に達している。「夫は子どもの世話をする」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると70.5%になっており、「夫は家事をしない」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると50.7%になっている。また、子育てについての話し合いに関する項目として「夫婦でよく子どもの話をする」に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると83.6%となっている。「夫は、あなたの関心事や悩みなど、現在のあなたご自身を理解してくれている」「ふだんから夫婦で、お互いの関心事について話し合っている」「子育てについて自分が感じている不安などを聞いてくれる」の項目に関しては

「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると、それぞれ73.3%、65.2%、61.3%となっている。

母親にとって父親が家事を手伝うことと子育てに協力することとはあまり直結していないようである。父親は子どもの世話をよくしており、夫婦間での話し合いもされていることから、夫婦で話し合いをしながら子育てをしていると考えられる。「夫は子どもを可愛がっている」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると92.9%となっている。「夫は子どもに甘い」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると52.9%になっている。しかし、「夫が子どもと一緒に過ごす時間は十分である」という項目に関しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると33.8%となっており、多くの父親が子どもを非常に可愛がり、約半数の父親が子どもに対して甘い態度で接しているようだが、毎日の生活の中では、父親が子どもと過ごす時間は十分ではないようである。

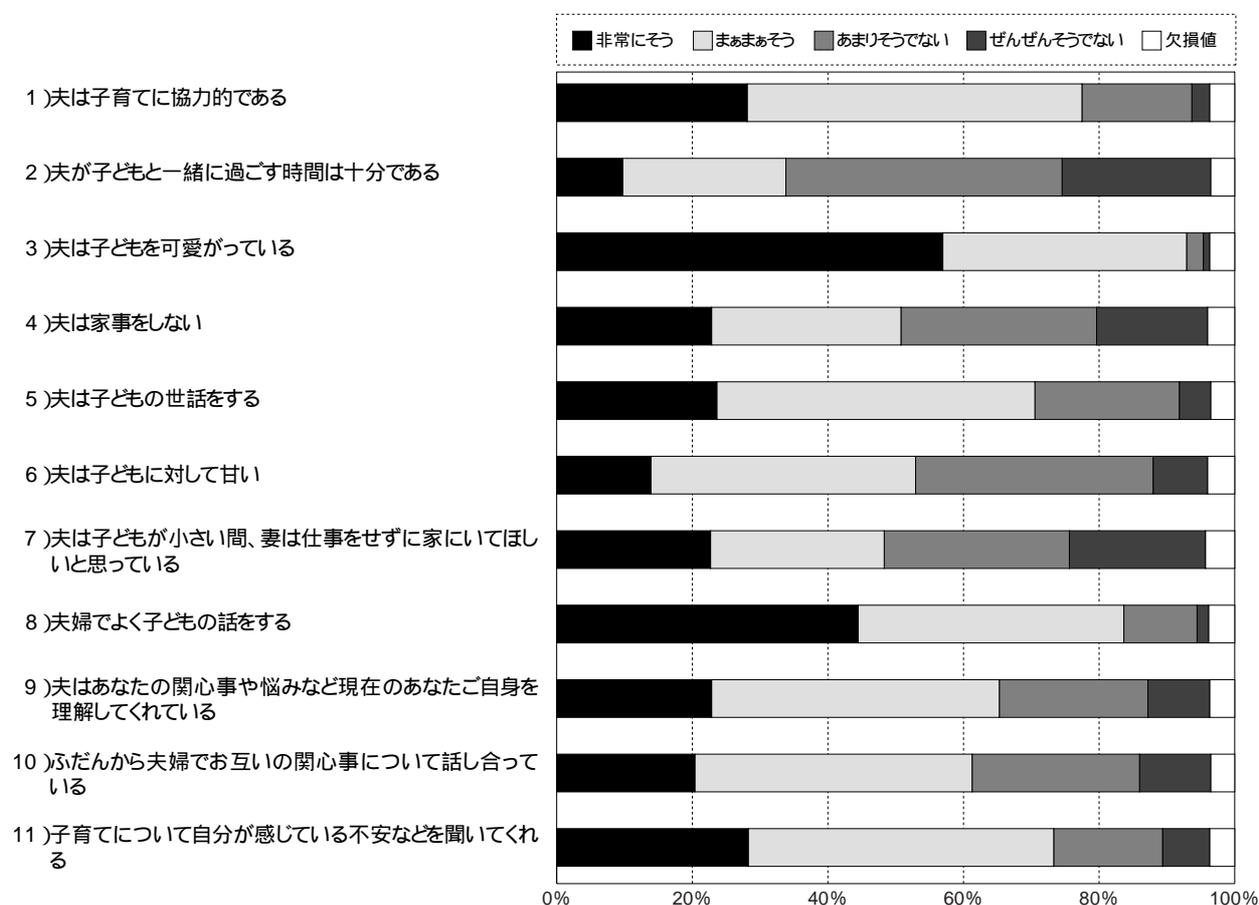


図2-17 父親の子育て参加について

# 第3章 育児ストレス得点と諸条件との関連

## 1. 子育て環境との関連

育児ストレス得点と他の項目との関連を、一元配置分散分析を用いて調べた。まず、子育て環境との関連では、母親の職業との関わりを調べたところ、育児ストレス得点の平均値は専業主婦が30.7、常勤が29.1、自営が28.9、パート・アルバイトが30.7、その他が26.8であった(図3-1)。専業主婦とパート・アルバイトがやや育児ストレスが高いという結果となったが、有意な差は見られなかった。母親の職業形態と育児ストレスは直接的な関わりは認められなかった。

家族構成との関わりを見たところ、育児ストレス得点の平均値は核家族が30.1、拡大家族(祖父母のみ)が32.3、母子家族が27.6、母子と祖父母の家族が26.3、父子家族が32.0、拡大家族(おじ・おばを含む)が30.7であった(図3-2)。祖父母のみの拡大家族が最も高く、母子と祖父母の家族が最も低いという結果になったが、有意な差は見られなかった。

## 2. 出産時との関連

次に出産時の状況と育児ストレスの関連について調べた。まず、出産した施設ごとの育児ストレス得点の平均値は、総合病院が30.3、産婦人科医院が30.1、助産院が27.9、その他が26.3であった(図3-3)。育児ストレスは総合病院が最も高く、その他が最も低い結果であったが、有意な差は見られなかった。

出産形態との関連では、育児ストレス得点の平均値は普通分娩が29.9、吸引・鉗子分娩が30.8、帝王切開が30.9、無痛分娩が30.0、その他が46.5となっており(図3-4)、その他の値が有意に高かった。(p<.05)しかし、その他は一人しかおらず、普通分娩、吸引・鉗子分娩、帝王切開、無痛分娩による育児ストレス得点の差はほとんどないと言える。

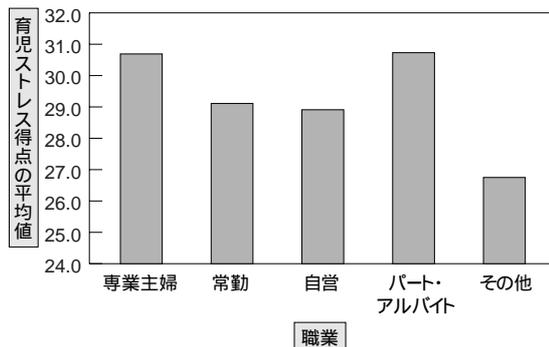


図3-1 親の職業と育児ストレスの関連

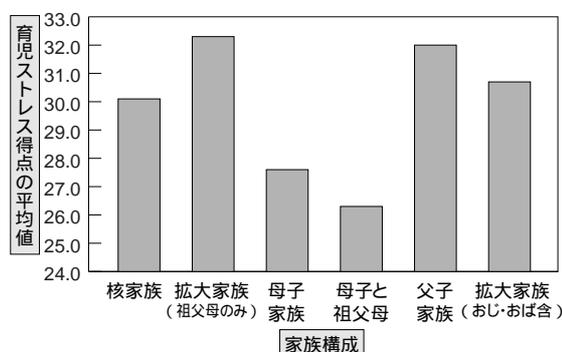


図3-2 家族構成と育児ストレスの関連

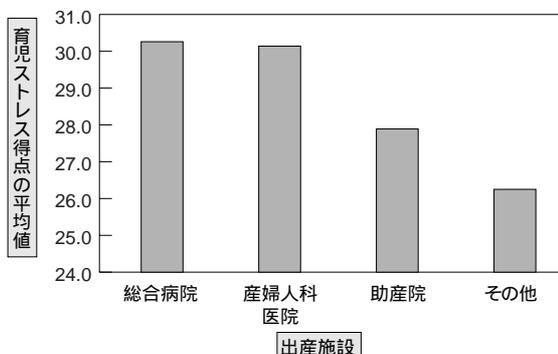


図3-3 出産施設と育児ストレスの関連

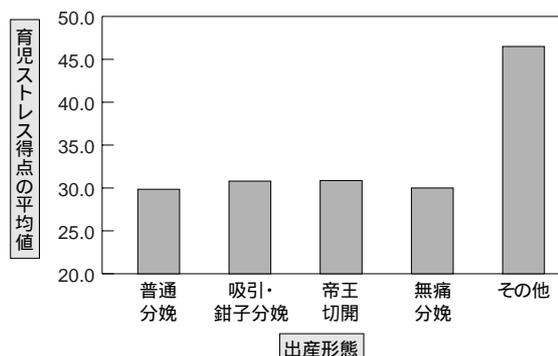


図3-4 出産形態と育児ストレスの関連

出産時に夫が立会ったかどうかによる育児ストレス得点の平均値は「なし」が30.5、「あり」が31.8となっており（図3 5）、有意な差は見られなかった。

今回の調査の結果としては、出産時における出産施設や出産形態は育児ストレスとの関連は見られなかった。前回の調査においては夫の出産時の立会いがあったほうが育児ストレス得点が有意に低くなっており、夫の立会いの有無が育児ストレスに関連があったが、今回の調査では関連が見られなかった。夫の立会いは前回の調査では33.1%であったのが、今回の調査では49.7%に増えており、出産時の夫の立会いが少ない時には夫が出産に立ち会ってくれることが特別なことと感じられ、守られていると感じた

り、安心感を持つことに繋がり、育児ストレスの軽減と関連していたと思われるが、約半数の父親が出産に立ち会うようになった今は、夫の立会いが特に育児ストレスの軽減には関連しなくなったのであろうか。

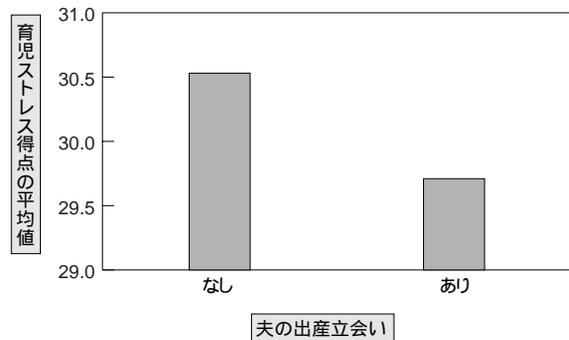


図3-5 夫の出産立会いと育児ストレスの関連

### 3. 子育て状況や母親の意識との関連

子育てにおける母親の気持ちや意識と育児ストレス得点の関連を調べたところ、まず「子どもを預けたいと思うことがありますか」という項目に対して、あると答えた人は31.0、ないと答えた人は28.5であった（図3 6）。これは有意な差（ $p < .001$ ）が認められた。子どもを預けたいと思う人は育児ストレスが高い傾向があった。また、「子どもを預けることにためらいがありますか」という項目に対して、あると答えた人は31.3、ないと答えた人は29.5であった（図3 7）。これも有意な差（ $p < .05$ ）が認められた。子どもを預けることにためらいを感じる人の方が育児ストレスが高い傾向があった。

「不安を話す相手がありますか」という項目に対して育児ストレス得点の平均値は、あると答えた人は30.0、ないと答えた人は35.4であった（図3 8）。これは有意な差（ $p < .05$ ）が認められた。不安を話す相手がない人の方が育児ストレスが高い傾向が認められた。

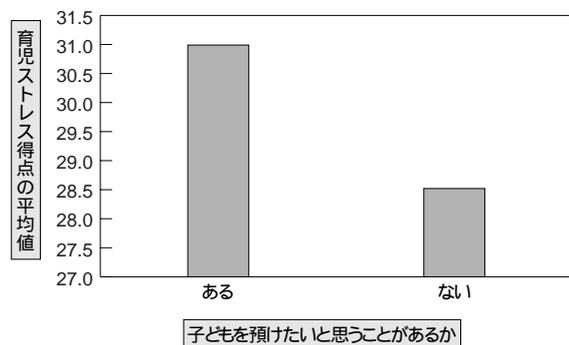


図3-6 子どもを預けたい気持ちと育児ストレスの関連

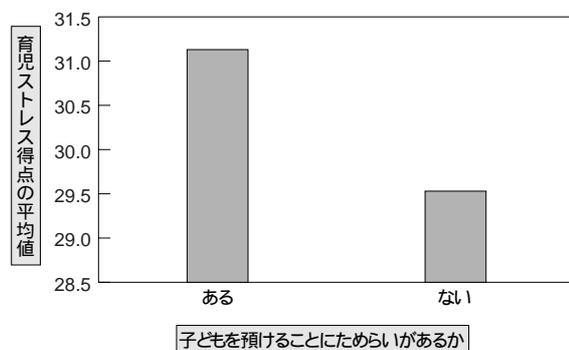


図3-7 預けることのためらいと育児ストレスの関連

「子育てにおいて、息抜きはできている」という項目に対して育児ストレス得点の平均値は、非常にそうは26.5、まあまあそうは29.8、あまりそうではないは33.3、ぜんぜんそうではないは32.9であった(図3 9)。これは有意な差( $p < .001$ )が認められた。多重比較(Tukey法)の結果、非常にそうとまあまあそう、あまりそうではない、ぜんぜんそうではないの間、まあまあそうとあまりそうではないの間に有意な差が見られた。息抜きができていると感じている人の方が育児ストレスは少ない傾向があった。

また、「一日中、子どもだけを相手にして過ごすのは苦痛である」という項目では、非常にそう、まあまあそう、あまりそうではない、ぜんぜんそうではないの順に育児ストレス得点の平均値は高くなっており、これらの結果を合わせて考えると、母親が子どもとの生活を閉塞的に感じる事が育児ストレスにつながると考えられる。

「良い母親であろうと無理をしている」という項目に対して育児ストレス得点の平均値は、非常にそうは35.3、まあまあそうは33.8、あまりそうではないは29.8、ぜんぜんそうではないは27.1であった(図3 10)。これは有意な差( $p < .001$ )が認められた。多重比較(Tukey法)の結果、非常にそうとあまりそうではない、ぜんぜんそうではないの間、まあまあそうとあまりそうではない、ぜんぜんそうではないの間、あまりそうではないとぜんぜんそうではないの間に有意な差が見られた。良い母親であろうと無理をしている人ほど、育児ストレスが高い傾向が認められた。

「自分は子育てに向いていない」という項目に対して育児ストレス得点の平均値は、非常にそうは37.1、まあまあそうは34.0、あまりそうではないは28.6、ぜんぜんそうではないは24.8であった(図3 11)。これは有意な差( $p < .001$ )が認められた。多重比較(Tukey法)の結果、非常にそうとあまりそうではない、ぜんぜんそうではないの間、まあまあそうとあま

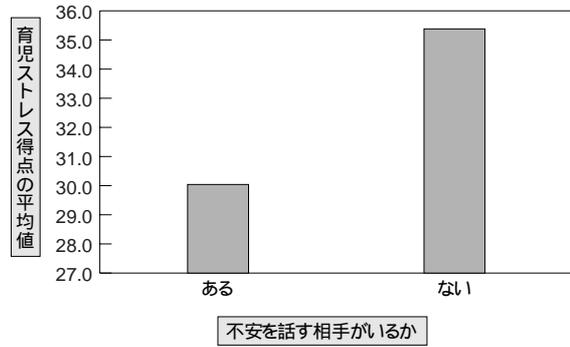


図3-8 不安を話す相手の有無と育児ストレスの関連

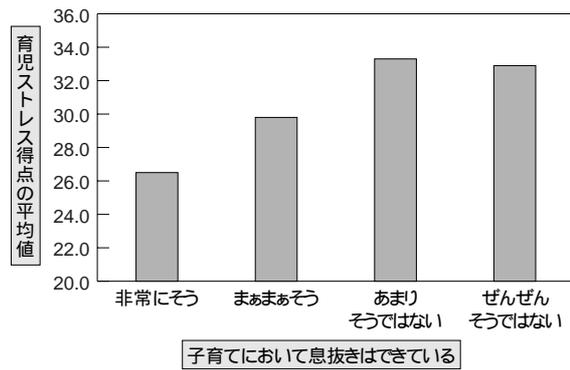


図3-9 息抜きの程度と育児ストレスの関連

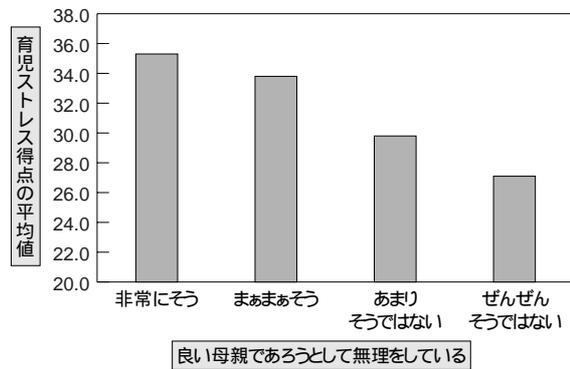


図3-10 母親としての気持ち(無理をしているか)と育児ストレスの関連

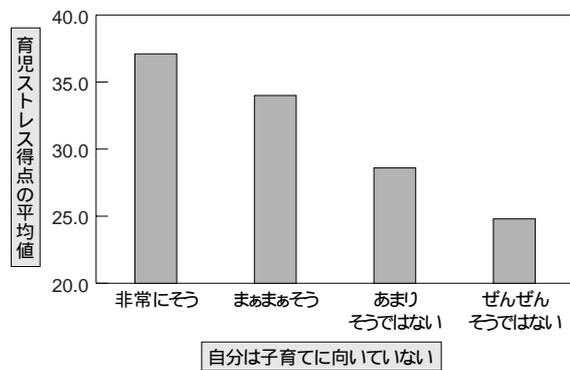


図3-11 母親としての気持ち(子育てに向いているか)と育児ストレスの関連

りそうではない、ぜんぜんそうではないの間、あまりそうではないとぜんぜんそうではないの間に有意な差が見られた。子育てに向いていないと感じている人の方が育児ストレスが高い傾向があった。

また、「現在の毎日の生活に満足していない」という項目では、非常にそう、まあまあそう、あまりそうではない、ぜんぜんそうではないの順に育児ストレス得点の平均値が高かった。

一方、「自分の生き方も大切にしたい」「子育てを通じて、自分も成長していきたい」「子育てのために、自分が犠牲になるのは仕方がない」という項目では、育児ストレス得点との関連は見られなかった。

子育て状況や母親の意識と育児ストレスとの関連を見ると、育児ストレスが高い人は、子どもを預けたいと思うことがある一方、預けることにためらいを感じており、安心して子どもを

預けることができている状況ではないかと考えられる。また、不安を話す相手がいない人、息抜きができていない人の方が育児ストレスが高いことから、母親自身に安心して関わられる人間関係があるかどうか、子育てだけの閉鎖的な生活ではなく、気分転換してほっとできる状況かどうか育児ストレスと関わりがあると思われる。

さらに、母親個人の生き方や子育てに関する考え方と育児ストレスの間には直接的な関連は見られなかったが、良い母親であろうと無理をしている人、現在の生活を肯定できない人、子育てに向いていないと感じる人は育児ストレスが高いことから、母親として理想像を持って努力する人や自信を持ってない人は育児ストレスが高い傾向があり、母親自身が力を抜いて自然体で過ごしているかどうか育児ストレスと関わりがあると思われる。

#### 4. 父親の子育て参加との関連

父親の子育て参加と育児ストレスとの関連を調べたところ、まず、「夫は子育てに協力的である」という項目に対して、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが28.9、まあまあそうが30.0、あまりそうではないが32.4、ぜんぜんそうではないが32.3であった(図3-12)。これは有意な差( $p < .001$ )が認められた。多重比較(Tukey法)の結果、まあまあそうとあまりそうではない、ぜんぜんそうではないの間に有意な差が見られた。夫が子育てに協力的でない方が、育児ストレスが高い傾向があった。

「夫は家事をしない」という項目に対して、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが31.5、まあまあそうが29.7、あまりそうではないが29.9、ぜんぜんそうではないが29.7であり(図3-13)、有意な差は見られなかった。夫が家事をするかどうかは育児ストレスとは明らかな関連はないようである。

「夫は子どもの世話をする」という項目に対

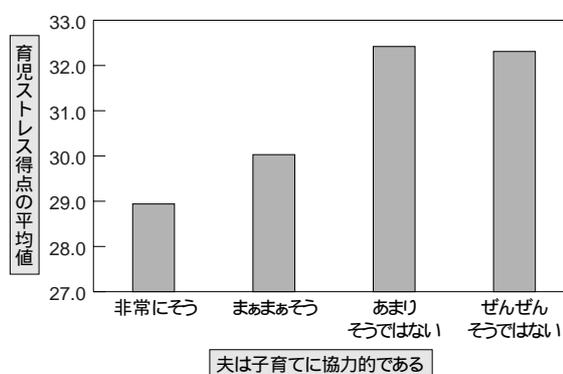


図3-12 夫の協力と育児ストレスの関連

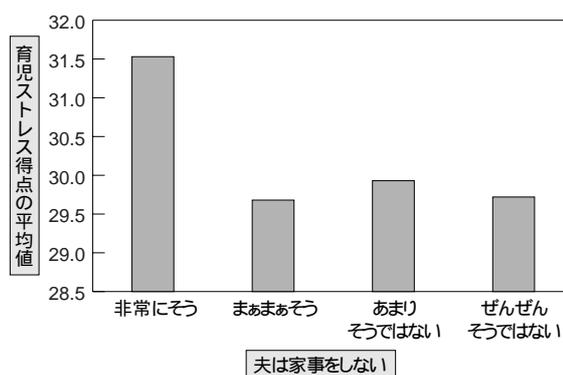


図3-13 夫の家事参加と育児ストレスの関連

して、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが29.5、まあまあそうが29.7、あまりそうではないが31.9、ぜんぜんそうではないが30.8であり(図3-14) 有意な差 ( $p < .05$ ) が認められた。多重比較 (Tukey法) の結果、あまりそうではないと非常にそう、まあまあそうの間に有意な差が認められた。夫が子どもの世話をする方が、育児ストレスは低くなっている。

また、「夫は子どもに対して甘い」という項目に対しては、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが30.1、まあまあそうが30.3、あまりそうではないが30.3、ぜんぜんそうではないが29.2であり(図3-15) 有意な差は見られなかった。父親が子どもに甘く接することは母親にとって育児ストレスとはならないようである。

「夫婦でよく子どもの話をする」という項目に対して、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが29.1、まあまあそうが30.3、あまりそうではないが33.8、ぜんぜんそうではないが31.6であり(図3-16) これは有意な差が ( $p < .001$ ) が認められた。多重比較 (Tukey法) の結果、あまりそうではないと非常にそう、まあまあそうの間に有意な差が見られた。夫婦で子どもの話をすることが少ないほど育児ストレスが高くなる傾向があり、話をよくしているほど育児ストレスは低くなっている。

「ふだんから夫婦でお互いの関心事について話し合っている」という項目に対して、育児ストレス得点の平均値は非常にそうが28.5、まあまあそうが29.6、あまりそうではないが31.1、ぜんぜんそうではないが33.4であり(図3-17) これには有意な差が ( $p < .001$ ) が認められた。多重比較 (Tukey法) の結果、あまりそうではないと非常にそうの間、ぜんぜんそうではないと非常にそう、あまりそうではないの間に有意な差が見られた。父親、母親として子どもの話をするのではなく夫婦としての話し合いも育児ストレスと関係していると言える。

父親の子育て参加と育児ストレスとの関連を見ると、母親が育児ストレスを感じる要因としては夫が子育てに協力的でないことが大きいと

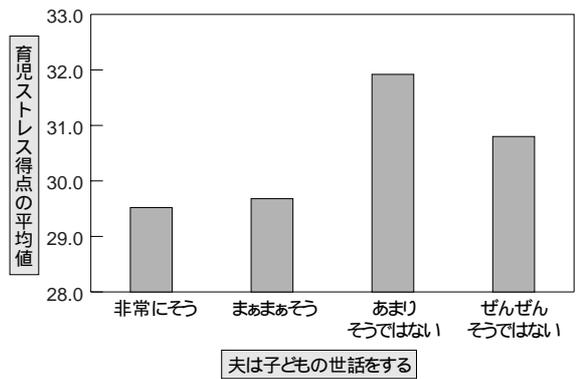


図3-14 夫の子どもの世話参加と育児ストレスの関連

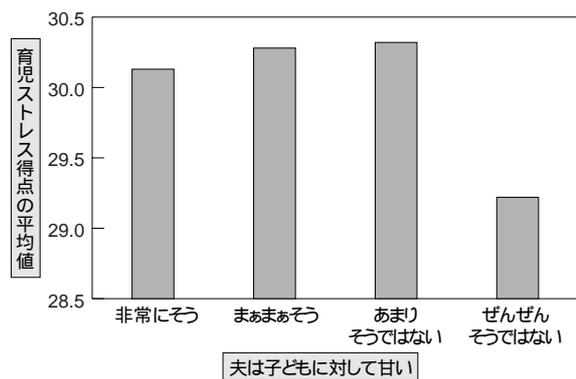


図3-15 夫の子どもへの態度と育児ストレスの関連

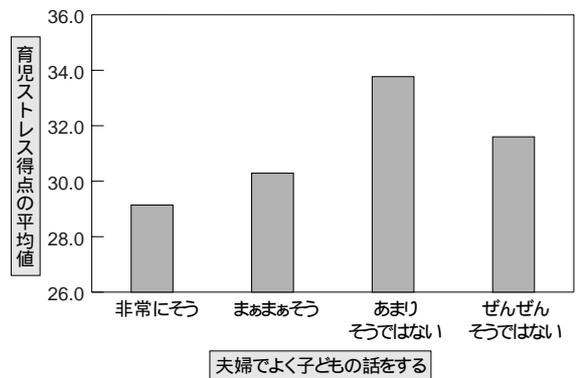


図3-16 夫婦の会話(子どもの話)と育児ストレスの関連

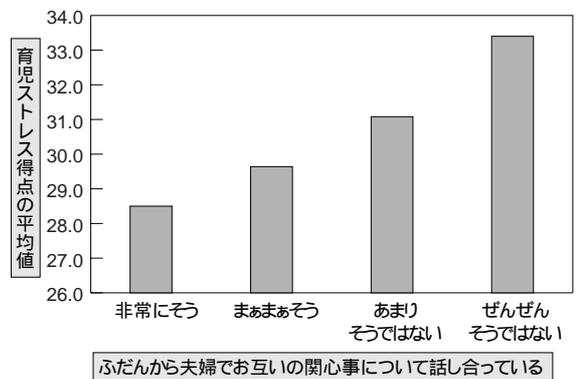


図3-17 夫婦の会話(お互いの関心事)と育児ストレスの関連

考えられる。母親が父親に求めていることは子育てに協力的であること、子どもの世話をしてくれることのようなのだが、家の用事をするのを父親に求めているわけではないようである。子どもの父親としては、子どもを可愛がり、一緒に過ごす時間を十分もっていること、また夫婦としては、子どものことについて話を一緒にしたり、自分の不安を聞いてくれることを望んでいる。このように、自分のことを理解してくれていると感じられ、お互いの関心事を話し合える関係でいることが、母親の育児ストレスの軽減とつながるようである。そのためには、父親は母親が求めている父親としての子育て協力とはどのようなものであるかを的確に捉えることが必要であり、お互いを理解し合えるよりよい夫婦の関係性を築いていくことが不可欠であると思われる。

## 5．まとめ

育児ストレスと諸条件との関連を調べたところ、育児ストレスは、母親の職業形態や家族構成などの環境、出産時の状況とは関わりが認められなかった。

関わりが見られたのは、子どもを預けることや父親の協力など子育てを実際に助ける存在があるかどうかという項目、不安を話す、息抜きをする、夫婦で話すなど母親の気持ちを支える存在があるかどうかという項目であった。また、子育てに向いているか、無理をしているかといった母親役割の捉え方も育児ストレスとの関連が見られた。

育児ストレスは、現在の生活の中でどのような手助けがあるか、母親の気持ちを支える人間関係があるか、「母親」という役割から解放される時間や人間関係があるかということと大きく関わっていると考えられる。また、このような要因が、母親の自信や母親役割の捉え方にも影響していると思われる。育児ストレスの軽減のためには子育てにたずさわりの母親を支える温かい肯定的な人間関係の輪が求められると考えられる。

## 第4章 子育ての葛藤場面における解決様式

### 1. はじめに

子育てを通して、子どもと関わりを持つことは、多くの喜びを享受する機会であると同時に、多くの葛藤を体験させられる機会ともなる。子どもの発する、屈託のない生々しくもストレートな欲求表出（自己主張）や感情表現（子どもの持つ原始性）は、時に親の感情を揺さぶる。親は普段の平静と安定をいとも簡単に覆されてしまうことも珍しくない。場合によっては、親が強い心理的な負荷を感じ、親子の関わりに危機的な状況を生む場合もある。

この章では、そんな親子の葛藤場面を取り上げ、子供の欲求表出（自己主張）に対し、親はどのように反応し、解決しようと試みているのかについて調査を行った。

### 2. 調査方法（投影法）について

前章まで、調査は質問紙法の手法（文章からなる質問項目に回答する形式）を用いてなされてきたが、この章では「P-Fスタディ（Picture-Frustration Study）」を援用した、「投影法（projective technique）」（注）を使用した。

投影法とは、比較的構造を持たない、あいまいな、あるいは、漠然とした状況・刺激に対する反応のあり方を分析し、その人に内在する特徴を把握しようとする手続きである。

投影法は質問紙法と比べて 意識的な加工（虚偽の回答など）が起きにくい、その人の持つ、より無意識的な生の傾向性が反映されやすい、と考えられており、この章の調査目的に、より適合すると判断した。

本調査では、“親子の一对一の関わりの場面”と、子どもの対人関係能力の成長と共に遭遇することになる、“親と子ども達の三者の関わりの場面”の二つを設定し、育児において一般的

によく見受けられる葛藤場面を作成し、親はどのような反応や解決方法をとるのかについて調査を試みた（場面1・2 43頁資料・調査質問紙参照）。

### 3. 場面1（二者関係における葛藤）

場面1は親と子どもの二者関係の葛藤場面である。総データ数648中、有効回答数627であった（複数回答や、恣意的な状況設定が行われた回答等は欠損値とした）。

子どもの“お菓子を買って欲しいという欲求”に対する、親の関わり方（欲求の取り扱い方）を分析したところ、大きなカテゴリーとして、

『欲求充足』（子どもの欲求をその機会に満たそうとするもの）、『欲求非充足』（子どもの欲求をその機会に直ちには満たそうとしないもの）、『関わり』（欲求の充足・非充足ではなく、子どもへの関わりに主眼を置くもの）、

『その他』の4つが見出された。複数のカテゴリーに重複する回答は、重複する各カテゴリーに均等の比率となるよう、重みを分割し分析を試みた。（図4-1）。

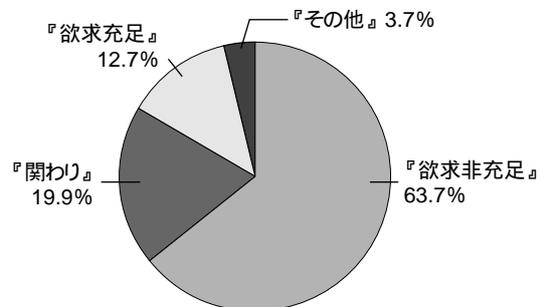


図4-1 場面1 カテゴリー内訳

『欲求非充足』が約6割を占めることから、過半数の親は、子どもの強い欲求表出に対しても、その力強さに安易に流され受け入れてしまうのではなく、自律性を保ちながら親子間の葛藤に耐え、親の思いを含めて対処している様子が伺われた。

また、「関わり」が次いで2割と多く、葛藤に耐えて応じるのみでなく、子どもが感じる葛藤そのものに関与している姿が見出された。

#### (1) 『欲求充足』カテゴリーについて

図4-2に『欲求充足』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

約8割が「ひとつだけ」(例:「一つだけね」等)で、数により欲求の充足を制限し葛藤の解決を経路付けていることが分かった。以下、「交換条件」(例:「(買ってあげるから)泣かないできちんとして」等)、「適応的行動」(例:「泣き止んで静かに出来たら(買ってあげる)」等)、「値段」(例:「100円までのおやつなら(買ってあげる)」等)、「無条件」(例:「はいはい。持っておいで」等)が数%で続いている。

欲求を充足するといえども、「ひとつだけ」や「適応的行動」、「値段」などで、何らかの経

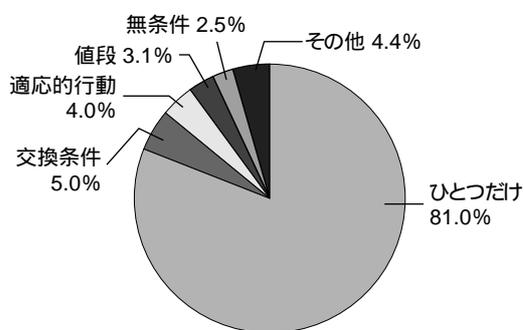


図4-2 場面1『欲求充足』カテゴリー内訳

路付けを行う親が約9割を占めている。その一方で少数ではあるが「無条件」で充足してしまう親や、同じく少数ではあるが、「交換条件」に持ち込むことで、親の思いに従わせるための対価として子どもの欲求を満たす親も存在していることが見て取れ、子どもの欲求表出の社会化や自律性の育み方に懸念が残るものも見受けられた。

#### (2) 『欲求非充足』カテゴリーについて

図4-3に『欲求非充足』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

比較的均等にばらつきがみられ、『欲求充足』カテゴリーよりもバリエーションが非常に豊かである。子どもの強い欲求を“満たさない”方向で関わる難しさに起因する、試行錯誤の反映ではないかと思われる。

先を見越して事前に準備する「事前に買わない約束」(例:「買わない約束だよ」等)が最も比率の多い下位分類の一つとして存在し、その用意周到さから、子どもの欲求の取り扱いに日々苦慮し、工夫している様子がうかがえた。

単純に「非充足」(例:「買いません」「ダメ!」等)のみを伝えるものも、最も比率の高

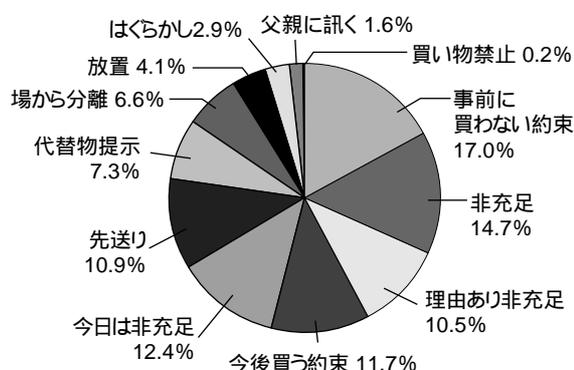


図4-3 場面1『欲求非充足』カテゴリー内訳

い下位分類の一つであるが、“今日は”と限定する「今日は非充足」(例:「今日はダメよ」等)、理由を伝える「理由あり非充足」(例:「お家にあるから買わないよ」等)が続き、言葉を添えることにより、葛藤を緩和するものも同程度見受けられ、親側の配慮(苦慮)がうかがわれる。

また、今の機会は満たせないが“先へと目を向けさせる”「今後買う約束」(例:「お家にあるのがなくなったら買おうね」等)、「先送り」(例:「また今度にしよう」等)も同程度ずつ見受けられている。

“代替りのものに目を向けさせる”「代替物提示」(例:「おうちにいっぱいおやつあるよ」等)さらには、「場から分離」(例:「帰るよー」等)・「放置」(例:「おいて帰りますよ」等)「はぐらかし」(例:「抱っこしてあげるね」等)のように“注意の焦点を別のものに転換させたり、すりかえるもの”も見受けられた。

「父親に訊く」(例:「お父さんにきいてみようね」等)はごく少数にとどまっており、“権威としての父親”に頼る例はわずかなようである。

### (3) 『関わり』 カテゴリーについて

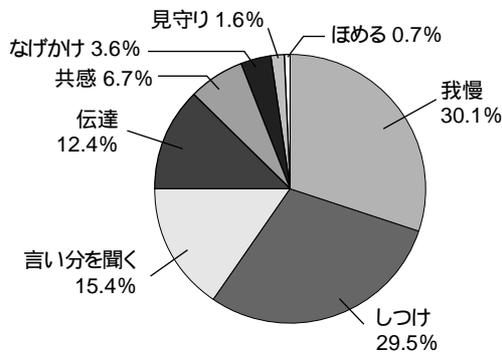


図4-4 場面1 『関わり』 カテゴリー内訳

図4-4に『関わり』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

「我慢」(例:「がまんしなさい」等)、「しつけ」(例:「ちゃんときれいに直しなさい!!」等)の比率が共に高く、併せると過半数となる。子ども(の欲求)の社会化に対し、親が高い関心を払っていることが見て取れる。

次いで「言い分を聞く」(例:「何が欲しいかお話してちょうだい」等)、「伝達」(例:「赤ちゃんみたいでカッコわるいよ!」等)、「共感」(例:「これ欲しいのねえ」等)、「なぜか」(例:「本当にいるものか考えてみようね」等)、「見守り」(例:しばらく様子を見て黙っておく、等)、「ほめる」(例:「かしこいね」等)と続き、表現することの尊重、対他意識の喚起、共感による支え、場を考える力の育みなどを通じた、親子の関わりから、他者との関わりへの親和性を育もうとする姿勢が見て取れた。

### (4) 『その他』 カテゴリーについて

図4-5に『その他』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

「無回答」(例:白紙)、「もてあまし」(例:「いい加減にしなさい!!」)、「無言」(例:何も言わない))が見受けられた。

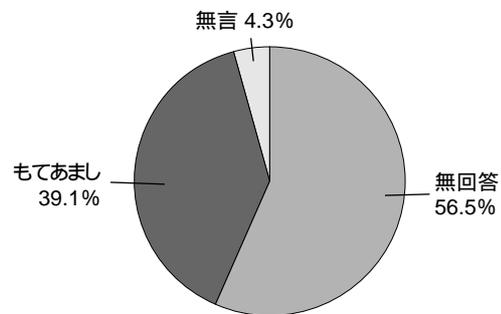


図4-5 場面1 『その他』 カテゴリー内訳

#### 4. 場面2（三者関係における葛藤）

場面2は親と子どもの三者関係の葛藤場面である。総データ数648中、有効回答数608であった（欠損値の条件は場面1と同様）。

子どもの“ぬいぐるみを独り占めしたい欲求”に対する、親の関わり方（欲求の取り扱い方）を分析したところ、大きなカテゴリとして、

『順番・交替』（順番・交替というルールづけで部分的にだが子どもの個人的欲求を満たそうとするもの）、『和の尊重』（子どもの欲求よりも“一緒に”“仲良くする”といった和を優先するもの）、『葛藤の撤回・軽減』（ぬいぐるみを主因とする子ども間の葛藤を親が統制しようとするもの）、『関わり』（子どもへの関わりを主眼に置くもの）、『その他』の5つが見出された（図4-6）。（複数のカテゴリへの重複回答の取り扱いは場面1と同様）。

日本は個人的欲求より、場や和を尊ぶ文化背景があると言われてきたが、『和の尊重』は、個人的欲求を部分的に満たすことの出来る、『順番・交替』のおおよそ2/3程度の割合にとどまった。（ルールがありながらも）子どもの個人的欲求の表出・充足を大切に取り扱おうとする親の方が、「和」という場や集団の原則を大切に取り扱おうとする親よりも多いことが伺え

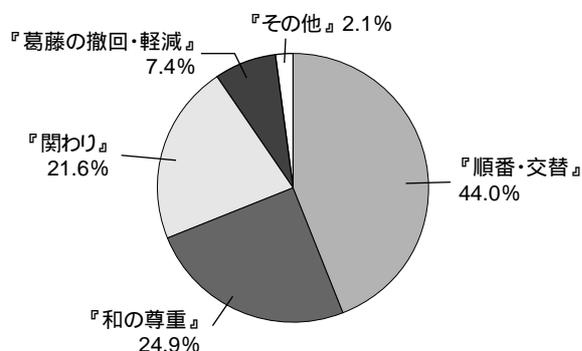


図4-6 場面2 カテゴリ内訳

た。

##### (1) 『順番・交替』カテゴリについて

図4-7に『順番・交替』カテゴリの下位分類の比率を示した。

単純な「順番・交替」（例：「順番で遊びなさい」等）の提示は約3割に止まり、優先順や交替のタイミングが恣意的に親により決定される「優先順あり順番・交替」（例：「A（B）ちゃんが遊んだらつぎはB（A）ちゃんが遊んだらいいからね」等）が約半数を占めている。それに対し、フェアな優先順決定となる、「ゲーム勝敗順」（例：ジャンケン・にらめっこ等）、「先着順」（例：「順番にしようか？どっちが先に持ってたのかな...？」等）や、優先順までは統制されないが、交替のタイミングが客観的に示される「時間制限」（例：「10数えたら交替ね」）は併せても2割に満たない。

優先順を巡ってはそれぞれの親の姿勢や価値観の影響が大きいことが示唆された（関連(6)）。

##### (2) 『和の尊重』カテゴリについて

図4-8に『和の尊重』カテゴリの下位分類の比率を示した。

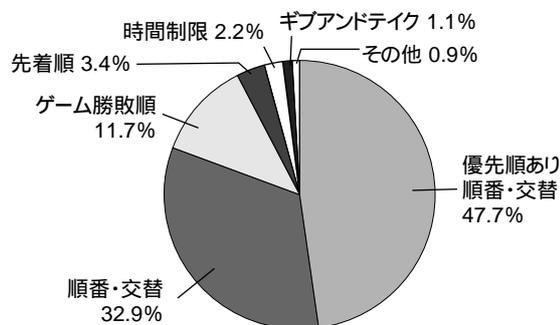


図4-7 場面2 『順番・交替』カテゴリ内訳

単純な「和の尊重」(例：「仲良く遊びなさい」「一緒に遊びなさい」等)の提示が6割超で、「優先順あり和の尊重」(例：「A(B)ちゃん、B(A)ちゃんに貸してあげようね」)は3割強に止まった。「和」を重視するがゆえに優先順は課題視されにくいためなのか、もしくは、「和」に優先順位をつけると“相手に譲る”形でどちらか一方が“独り占めしたい”という個人的な欲求を全く抑圧・放棄せざるを得なくなる状況を作り出すことになるということに対するためらいからか、個人的欲求を部分的に満たすことが出来る『順番・交替』カテゴリーと比べ、親の恣意性の出現する余地は少ない(関連(6))。

(3)『葛藤の撤回・軽減』カテゴリーについて

図4-9に下位分類の比率を示した。

子供同士が欲求を力で生々しくぶつけあう場面は親の気持ちが揺さぶられる場面であろう。

“取り合い”という、欲求を剥き出しにした、原始的で動物的な行為を禁止する「取り合い禁止」(例：「けんかやらないで」等)が最も多く、約3割を占めた。少数であるが、かわり合い自体も禁止する「遊びの禁止」(例：「けんかするのなら、ぬいぐるみで遊ぶのはやめよ

っか」等)も見られた。

子ども間の葛藤そのものではなく、親が介入して葛藤の源となっている玩具を物理的に分離してしまう、「親が取り上げる」(例：「けんかするならぬいぐるみは没収します！」等)、「片付け提示」(例：「仲良く遊べないなら片付けようね！！」等)も併せると3割弱に上る。

その一方、どちらか一方の子どもに代替物を提示する「代替玩具」(例：「Aちゃん、こっちのおもちゃで遊ぼう！」等)、両者に別の遊びを提示する「別の遊び」(例：「よし！ちがうあそびを一緒にしましょう！」等)など、代替りのものに視点を移行させることにより葛藤の軽減を試みようとするものも併せると約3割見受けられた。

(4)『関わり』カテゴリーについて

図4-10に『関わり』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

2人の中の争いに埋没する子ども達に、第3のものである玩具に対し注意を促す「玩具の心情・状況」(例：「ねえ 2人共、熊さん痛がってるよ」等)が最も多く半数弱を占めた。相手の子どもの気持ちを伝える「伝達」(例：「Bちゃんもあそびたいのよ～」等)や、玩具にな

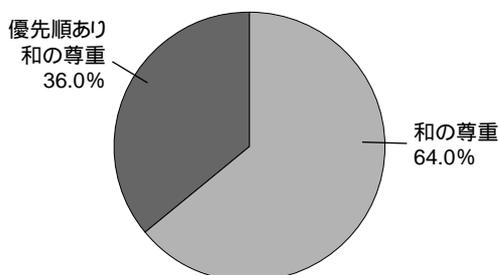


図4-8 場面2『和の尊重』カテゴリー内訳

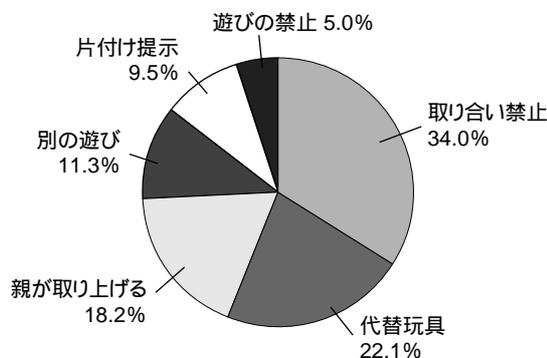


図4-9 場面2『葛藤の撤回・軽減』カテゴリー内訳

りきり心情として状況を訴える「玩具を演じる」(例：「痛いよー」等)を併せると、“親がコミュニケーションを仲介し対象への意識を育もうとするもの”が約6割を占め、場面1の『関わり』カテゴリーの内容との大きな違いとなっている。

他者への関わり方の具体例を示す「例示」(例：「Aちゃんに貸してと言っごらん」等)と自発的な解決を促す「なげかけ」(例：「A君、B君、2人で遊べるように考えてごらん」等)など、他者との関わりに主体として関与できる力を育てようとするものも、併せると2割弱見受けられた。

また、「ほめる」(例：「かしこーい!!」等)、「共感」(例：「2人ともくまさんで遊びたいのね。」等)、「見守り」など、葛藤場面に際して子どもの気持ちの支えとなるものが約1割見受けられた。

「共同遊び」(例：「一緒におうちごっこしてみる？」等)、「親の参加」(例：「パパと3人で遊ぼう」等)など、葛藤を超えた関わりを体験として提示するものも併せて1割弱見られた。

総じて、親の関わりの中で他者への意識・姿勢を育もうとするものが大半であった。

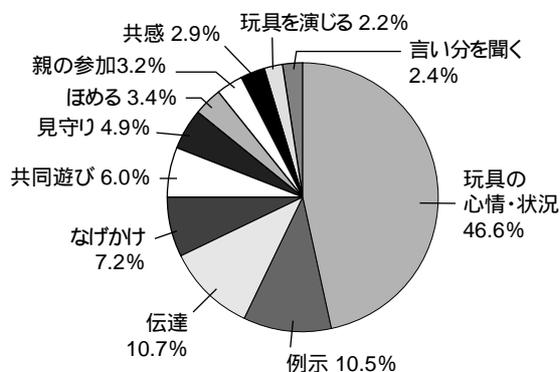


図4-10 場面2『関わり』カテゴリー内訳

#### (5) 『その他』カテゴリーについて

図4-11に『その他』カテゴリーの下位分類の比率を示した。

「無回答」(例：白紙)、「もてあまし」(例：(無言でたたか、連れて帰る)、「無言」(例：「何も言わない」)、「関心」(例：「どうしたの？」等)が見受けられた。

#### (6) 優先順をめぐって 親の恣意性

図4-12に優先順のありようを示した。

全体では、わが子と設定されているA優先と、B優先の割合は1：3と、優先順位をめぐっては全般的に“他者に譲る”という傾向が強く、日本的な和の尊重の一端が垣間見られる。カテゴリー別に目を向けると、『順番・交替』カテゴリーでは1：2の割合であり、両者とも欲求を満たす機会を与えられるのであればわが子が優先される割合が増える傾向のようである。その一方、『和の尊重』カテゴリーでは1：25で、圧倒的にB優先である。また、視点を変えて表現すれば、少数であるが、Bの欲求を抑圧してでもわが子の欲求を優先しようとする親も少数だが存在するようである。

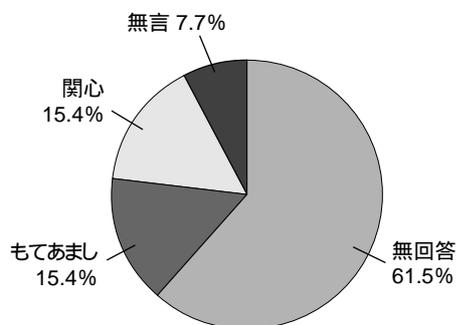


図4-11 場面2『その他』カテゴリー内訳

### (7) コミュニケーションの仲介

A・B両者ともに均等に声をかけ、それぞれの思いを相手に伝える親は5.9%と少数であった(図4-13)。実際は、提示された場面のその後もやりとりは続くので、両者に声をかける機会も出てくるであろうが、初めから両者へのメッセージの均等性を強く意識して関わる親の割合は低いようである。

## 5. 『その他』の回答から

白紙の回答は通常欠損値とみなすことが多いが、本調査では回答スペースが十分に広く、見落としの可能性は低い。そのため、白紙の回答は、“回答に対する何らかの心理的抵抗”が反映されたものと捉え、「無回答」と分類し、『その他』カテゴリーに加えることとした。

場面1・2両方ともが「無回答」の回答者は6名見受けられた。また、場面1のみ「無回答」は7名、2のみ「無回答」は2名と場面1の方が白紙の回答が多かった。

「もてあまし」も場面1が9名、場面2が2名と前者の方が多く見られた。

これは、場面1が、ともに当事者同士で、互いの表出が互いに直接向けられる二者関係であることが関係し、意識的にはコントロールしづらい感情がより掻き立てられやすかったためではないかと思われた。

第三者を介さない、親子二者のみの育児環境は、親子の感情的な葛藤のリスクがより高くなりがちであろうことが推察される。

これらの回答を行った親は少数であるが、場合によっては、危機的な事態に発展する可能性を内包している。周囲からの積極的な配慮や介入が望まれるのではないだろうか。

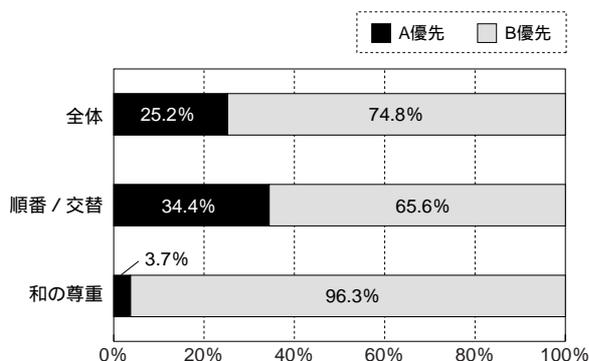


図4-12 場面2 優先順位比率

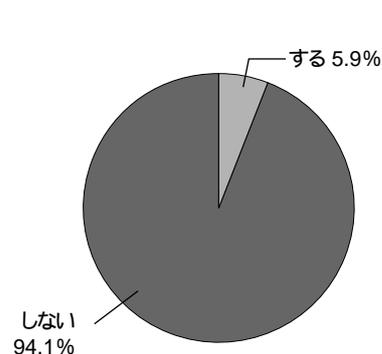


図4-13 場面2 コミュニケーションの仲介

## 6 . まとめ

総じて、場面1・2ともに、大多数の親は子どもの強い欲求表出に安易に流されずに、親の思いも織り交ぜながら関わり、子どもとの葛藤を解決してゆこうとしている様子が見て取れた。しかしながら、例で挙げた、親の反応の語尾などにも、親の感情の揺れをリアルに垣間見ることができる。

親の感情の揺れは、親の“子どもの欲求を認めるべきか統制すべきか”という、自身の価値観や思いと向き合うこと、もしくは、子どもの欲求への対処の類を超えた、もてあますような不快感やなんともいえない自らの感情的な反応（親個人が持つ心理的な課題と関わっている場合もある）と向き合うことへの葛藤である。

この調査で明らかになった、親の苦慮と知恵の蓄積のような、葛藤場面への解決様式の豊富なバリエーションが、今後の子育ての知恵のひとつとして、そして親同士の共感と体験の共有、親子をとりまく周囲の方々からの子育てに対するあたたかいご理解に役立てていただければ幸いである。

(注) P-Fスタディ (Picture-Frustration Study)

1945年、ワシントン大学のローゼンツアイク (Rosenzweig, S.) により公刊されたもので、「絵画欲求不満テスト」とも呼ばれる。児童用・青年用・成人用があり、いずれも24場面より構成されている。各場面には2人の人が描かれ、日常的状況で起こる欲求不満が右側の人に生じている。左側の人の発言に対し、“右側の人はどう答えるか”(「あなたなら」ではない)を反応してもらう形式となっている。アグレッション(主張性)の「方向」と「型」という視点から反応を分析し、その人の特徴を見出し、いこうとするものである。

## 第5章 自由記述の分析

### 1. はじめに

今回の調査質問紙末尾に、日頃子育てについて感じたり、考えたりしていることを記入する自由記述欄を設けた。本章では、この欄への回答を分析する。

### 2. 数量的分析

自由記述欄への記入は、質問紙総数648通のうち、363通(56.0%)にあった。

363通の内訳は、保育所通所児の保護者325通中181通(55.7%)、幼稚園通園児の保護者315通中177通(56.2%)、在宅児保護者8通中5通(62.5%)となっている。質問紙返送者の5割強が自由記述欄に何らかの記入をしたことになる(表5-1)。

表5-1 自由記述欄への記入者数と記入率

	保育所	幼稚園	在宅	合計
返信数	325	315	8	648
記入者数	181	177	5	363
記入率(%)	55.7	56.2	62.5	56.0

### 3. 記述内容の分類

内容の分析にあたって、記述された内容に応じて分類を行い、子育て中の保護者の心境を描写することを試みた。

まず、子育てについて率直な感想や、記入者自身の考え方や方針のみが記入され、悩みや問題などが述べられていないものを一つのグループとした。

それ以外のものは、ほとんど子育てについての悩み、迷い、問題、要望などについて言及したものだ。これらを内容別に分類すると、子育てをしている社会の状況について記したものと、子育てをしている保護者自身についての悩みや迷いが記入されたものがあった。社会の状況と、保護者自身の悩みが重なることもあ

たので、複数回答形式で集計した。

また、今回の調査についての意見・感想も散見されたので、これらも集計しておいた。

さらに、上記の項目のどれにも当てはまらないものを、その他、とした。

以上をまとめると、以下のような分類になる。

- (1)子育てについての率直な感想・自らの方針
- (2)子育てをしている社会の状況に関する指摘
- (3)保護者自身の子育て上の悩み
- (4)今回の調査に対する意見・感想
- (5)その他

以上を数量的に示したものが以下の表5-2である。

表5-2 自由記述欄の内容の分類

	保育所	幼稚園	在宅	合計
(1)子育てについての率直な感想・自らの方針	32	50	1	83
(2)社会の状況に関する指摘	99	71	3	173
(3)保護者自身の子育て上の悩み	66	69	2	137
(4)今回の調査に対する意見・感想	6	4	0	10
(5)その他	5	5	0	10
合計	208	199	6	413

表5-2から、自由記述欄への記入は、子育てについての率直な感想や自らの方針を記したもののよりも、何らかの悩みを記したものが多かったことがわかる。

また、幼稚園通園児の保護者に比べて、保育所通所児の保護者の方が、社会の状況に関する指摘を記入した数が多い。

さらに、上記の(2)の「社会の状況に関する指摘」を詳細に分類すると、以下の小項目に分けられる。

### 子育てについての価値観・しつけ

子育てについての価値観、しつけのあり方が変化したり、多様化してきたことへの戸惑いを記したものを。

### 子どもの安全

近年、子どもを巻き込んだ事件、事故が多発していることが影響しているのか、子どもの安全をいかに守るのかということに言及したものを。

### 子育てに関する情報が過多であること

子育てについての情報が多すぎることへの戸惑いを記したものを。

### 子育てをしながら仕事をする

子育てをしながら保護者、特に母親が働くことについての悩み、迷い、軋轢、苦勞などを記したものを。

### 子どもを預ける場

子どもを預ける場の問題について記したものを。

### 子育てをする上での経済的な問題

子育てをすることが経済的な負担を強いられることについて指摘したものを。

### 行政への不満・意見

子育てに関する行政への不満や意見の記述。

### その他

以上 ～ に分類されなかったもの。

これらを数量的に示したものが、表5-3である。

表5-3から、全体で指摘が多かったものは、順番に 子どもを預ける場、子育てについての価値観・しつけ、子育てをしながら仕事をする、子どもの安全、であることがわかる。

しかし、保育所通所児の保護者と、幼稚園通園児の保護者を比べると、多かった項目が異なっている。保育所通所児の保護者では、子育てをしながら仕事をする、子どもを預ける場、子育てについての価値観・しつけの順が多かった。一方で、幼稚園通園児の保護者では、子育てについての価値観・しつけ、子どもの安全、子どもを預ける場、の順となっている。保育所通所児の保護者と幼稚園通園児の保護者では、問題の優先順位が異なり、それぞれのおかれた状況や悩みも違っていることがうかがえる。

また、表5-2で挙げた分類のどの項目にも共通して指摘される内容として、次の2つが見られたので、付加的事項として同時に抽出してみた。

#### a) 子育て中の保護者の精神衛生について

これは、乳幼児期の子どもと保護者の二人だけで一日中過ごすことがストレスになる、子育て中の保護者、特に母親には気分転換、リフレッシュが必要、仕事に行くことが気分転換になっている、など、子育て中の保護者の精神衛生のあり方について言及したものである。

#### b) 夫・家族への不満

子育てにおいて、夫や家族に不満を持つ声が挙がっていたので、一つの項目として拾い上げた。

これらをまとめると表5-4のようになる。

表5-3 社会の状況についての細分類

	保育所	幼稚園	在宅	合計
子育てについての価値観・しつけ	24	24	0	48
子どもの安全	15	23	1	39
子育てに関する情報が過多であること	6	3	0	9
子育てをしながら仕事をする	38	2	0	40
子どもを預ける場	35	20	1	56
子育てをする上での経済的な問題	13	11	0	24
行政への不満・意見	8	9	1	18
その他	11	7	1	19

表5-4 付加的事項

	保育所	幼稚園	在宅	合計
a) 子育て中の保護者の精神衛生について	27	23	2	52
b) 夫・家族への不満	15	9	0	24

#### 4. 具体的な記述の内容

以下に自由記述欄を抜粋、引用しながら、記入された内容を分析する。(以下、丸ゴシック体は自由記述の引用)

##### (1) 子育てについての率直な感想・自らの方針

- ・子育ては勉強ですね...。
- ・毎日がとても楽しいです。この先がとても楽しみです。
- ・(抜粋)今まで目を向けなかった「虫」や「ヒーロー」ウルトラマンなど、「電車」など男の子を持ったからこそ知ること、目を向けることができ、大人になった今でも発見の毎日楽しくすごすことができます。

これらは、文字通り、日々子育てをするなかでの感慨や発見などを述べたものである。

さらに、子育てに関する自らの方針を述べたものもある。

- ・(抜粋)子どもの長所の一番の理解者でありたいと、夫と話している。
- ・(抜粋)子供は本当にかわいいけど、かわいいただけですまない時もある。未来の大切な宝物。大切に大事に育てたい。でも基本的な事はしっかり、しつけていきたい。

これらからは、子育ての責任を負いながら懸命に子どもと関わっていかうとする保護者の姿がうかがえる。

しかし、このような内容は先にも触れたように、比較的少数であり、多くの記述には悩みや迷い、課題や問題提議、要望が記されていた。以下に詳述する。

##### (2) 社会の状況に関する指摘

この項目については、前節で述べたように8つの小項目に分類したので、小項目ごとにまとめてみる。

###### 子育てについての価値観・しつけ

- ・(抜粋)すべての親が自分の子供がかわいくて仕方がないように思うのはおかしい
- ・(抜粋)私たちの世代は「子どもを産んでも仕事を続ける」と「母は家庭に」のダブルスタンダードの間に悩む人が多いと思います。
- ・(抜粋)なんで幼児は母親と...母親と一緒に...と必ず母親と一緒になのでしょう...(中略)まだまだ社会全体が父親は仕事、母親は子供のためという感じです。
- ・(抜粋)少子化の影響か親が子供に必要以上に關心を持ちすぎ、自分で子育てをしんどくしていった部分があるのでは...
- ・(抜粋)最近「適度」という言葉が育児から消えかかっている気がします。

男女雇用機会均等法の施行以来、女性の社会進出などが喧しく取り上げられ、社会の価値観は多様化したように言われるが、これらの声をみると、理想とされる母親像は案外旧来と変わっていないのかもしれない。むしろ少子化の影響か、場合によっては母親と子どもの結びつきがより強くなっている可能性もうかがえる。

また、子どものしつけについて他の家庭との齟齬についての言及もみられた。

- ・(抜粋)親が子供を育てない家庭が多いと思う。
- ・(抜粋)自分が親から受けた躾と、今、周りで行なわれている躾の違いにかなりのギャップを感じています。
- ・(抜粋)昔は当たり前だった子育てがいかに困難か、身につまされる。

現代の子育ては、さまざまな価値観や方針、情報が入り乱れるなかでなされていることがうかがえる。

###### 子どもの安全

- ・(抜粋)最近の子供の事件を見るたびに不安。
- ・(抜粋)子供をめぐる環境がとくに安全面で悪化していることが、一番心配です。うちの

2人の子供は、我々の世代が子供の頃なら、一日中でも外で子供だけで遊んでいた年齢になりましたが、今の世の中ではそうさせることができません。

- ・(抜粋)人なつっこい子供に対して他人を警戒するように教えなければならない現実が悲しい。

近年の子ども、幼児が被害者となる事件、事故についての報道の影響か、現代の保護者には子育てをする社会環境が危険の多いものと認識されているようである。

子育てに関する情報が過多であること

- ・(抜粋)世間の子育てに対する情報が多すぎるので、それに振り回されないように心がけています。
- ・(抜粋)育児に関する情報があふれていて、ソースによって違う内容などもあり、困る事がある。

今回の調査では、子育てについての情報源に関する質問を作成し、保護者が多くの情報源から子育ての情報を得ているという結果を得た。しかし、情報源が増えることは、迷いが増えることでもあり得る。知らなければ悩まずに済んだことで悩まねばならなくなったとも言える。

このように情報が増えたと言われる一方で、個人情報保護法施行以降、個人情報へのアクセスは非常に難しくなっている。そのような状況を端的に指摘する記述もあった。

- ・(抜粋)個人情報の保護とか言って、クラスの名簿などわたさなくなりましたが、逆に親同士のお付き合いがしにくくなってきています。

子育てをしながら仕事をする事

子育てをしているなかで、大きな問題となるのが保護者の仕事である。特に、母親が仕事している場合、母親自身の仕事のあり方、また配

偶者の仕事のあり方が、子育ての困難さに直接結びつく。

- ・(抜粋)母親が常勤で定年を迎えるのは難しい時代です。
- ・(抜粋)14年勤続の(メーカー)管理職の立場になるまで努力をつみかさねてきたのに今手離してしまうと水の泡である気持ちのジレンマ。
- ・(抜粋)フルタイムで働いていますが、子供が小学校にあがるまで等、期限つきでよいので時短勤務が認められればと思います。また夫の育児時間が少ないこと(したくてもできない。してもらいたくても無理なこと)が、不満であり不安です。
- ・(抜粋)保育所以外で見て頂く場所がないので子供の病気の場合など、仕事を休まねばならないことも多く肩身が狭いです。
- ・(抜粋)子育て期(30~40代)の男性は仕事量が多く、帰宅が遅かったりするので育児の負担が女性にかかりがち。

これらの声から、幼い子どもを抱えながら母親が働くことの困難が垣間見えるようである。職場、家族の理解と協力がなければ仕事を続けることは難しい。それだけに、別項で取り上げるように、夫や家族への不満も生じるのだろう。

なお、子育てをしながら仕事をする事についての記述は、保育所通所児の保護者に多くみられた。それだけ切実な問題であることがうかがえる。

子どもを預ける場

社会の状況に関する指摘のなかで一番数が多かったものが、子どもを預ける場についてのものである。

- ・(抜粋)公立の保育所の場合、仕事の時間しか絶対に預けてはいけなないので、もっと“子供のための時間”として親のリフレッシュ時間もOpenに預けられたら...と思いま

す。

- ・(抜粋)幼稚園での教育を受けさせたいと思うが、共働きなので、19時くらいまでの延長保育がついていない限り不可能。通わせたいのに出来ない。自分が仕事をやめるべきなのか悩みます。
- ・(抜粋)小学校の学童保育の充実がないので退職を考えています。
- ・(抜粋)子供をあずかってくれる人となるとむづかしい。病院ややむをえない事情なら友人に頼めば何とかなるが、夜間や自分のたのしみのための場合は本当にむづかしい。
- ・(抜粋)病時保育所がないのは不便。
- ・(抜粋)保育園の待機児童の問題がありますが、幼稚園でも同じような現状があります。

子どもを預ける場についての記述は、保育所通所児の保護者に多かった。母親が働くことと、子どもを預けることは密接に関係しており、子どもを預ける場の体制が母親の労働のあり方を規定していることがうかがえる。十分とは言い難い託児サービスのなか、母親は子育てをしながら働いている、とも言える。

#### 子育てをする上での経済的な問題

母親が働く背景として、経済的事情も見逃せない。

- ・(抜粋)本当はあと2人くらい欲しいのですが、経済的にムズかしいです。
- ・(抜粋)経済的に苦しくて、かと言って子どもが小さいので今は働きに行くこともできない。
- ・(抜粋)ゆったり子育てをしようと思っても仕事もありますし、経済的な面で辞めることもできず毎日自己嫌悪になりながら過ごしています。
- ・(抜粋)私が子供の頃は全学歴公立で十分な教育がうけられたのに、今はそれではこころもとなくなっており結果親の財力次第で子の学力がきまってくるような淋しい社会

になってきているのでは。

子育て中は経済的な負担も増える。しかし、その改善もままならない、という状況があることがうかがえる。

#### 行政への不満・意見

- ・(抜粋)子育て支援というけれど、支援してもらってる実感がない。児童手当でではなく、地域が一体となって安心して子育てできる環境づくりをしてほしい。
- ・(抜粋)公的な施設を利用して、子供の講座に参加しているのですが、下の子がいると参加しないで下さいと言われたことが何度もあり、市の施設であるのに、どうして弟妹がいるだけで差別されないとダメなのか...疑問に思っています。

#### その他

から 以外の、社会に関する指摘として、駅などの公共施設の設備が子ども連れには不親切である、気軽に子育てについて相談できる施設がない、子育て中の母親同士を結びつけるネットワークがなく特に子ども乳児期の頃は孤立してしまう、などの記述がみられた。

#### (3) 保護者自身の子育て上の悩み

子育てをしている社会についての記述のみならず、保護者自身が抱える子育て上の悩みについての言及も多くみられた。

その内容は、子どもに関するもの、保護者自身に関わるものがあった。子どもに関するものについては、誰もが一度は抱えるであろう普遍的な問題も多いように見受けられた。

- ・(抜粋)夜、寝るのが遅すぎて困ります。
- ・(抜粋)最近言葉遣いや行動が乱暴になってきてクラスのお友達に迷惑をかけているのでは...と思い心配です。
- ・(抜粋)効果のある叱り方がわからない。

また、保護者自身に関するものは、さまざまであり、多くは個人的な事情について触れたものであったので、一部を紹介するにとどめる。

- ・(抜粋)あまり「2人目は?」と聞かないでほしい。
- ・(抜粋)子育てに正解はないとわかっているも、「まちがっていません」と誰かに言い続けてほしい。

#### (4) 今回の調査に対する感想

自由記述欄には、少数ではあったが、今回の調査に対する感想も記されていた。

- ・子育てに対してこのアンケートで改めて考えることが出来ました。ありがとうございます。
- ・(抜粋)こういうアンケートを書くことにより本当の自分の気持ちをあらためて見なおすよい機会になりました。ありがとうございます。

#### (5) その他

上記の(1)から(4)の内容以外の記述としてみられたものは、以下のようなものである。保護者自身は悩んではいないが、孤立した状況が母親を追い込んでいるのではないか、など現代特有の問題を指摘するもの。出産・育児について何も知らされていなかったことに気づいたというような教育についてのもの、などである。

#### 付加的事項

本章冒頭にも述べた通り、上記の(1)~(5)のどの分類にもみられた内容が、子育て中の保護者の精神衛生と夫・家族への不満であった。

##### a) 子育て中の保護者の精神衛生

- ・(抜粋)上の子が生まれて1ヶ月で里帰りから自宅へ戻ってきた頃(中略)朝から晩まで娘と二人きり。夫は帰りが遅く、誰とも話をせず、ことばも忘れそうだった。

- ・(抜粋)育児、家事のみだと誰とも話さないまま3日くらいすぐにたってしまう。すごくストレスを感じ、自分が育児に向いていないのでは?ダメな親だ!と自己嫌悪におちいる。
- ・子育ては、やはり母親に責任が多くあり、日々、緊張し、孤独で不安感がある。余裕のある気持ちを保つには、多くの人々のささえがあると感じられていればいいが、子と母親という1対1の関係でいると、精神的に健康でないと思う。
- ・(抜粋)仕事をする前は、一日中子供と一緒に、イライラしたりして、子育ては向かないと思った事もあります。自分の時間がほしい。子供から離れたいと何度か思ったことがあります。仕事を始めて気分転換もできて、それがかえって子供にたいする気持ちが強くなったように思いました。

このように、子どもと二人きりの状態は、保護者にとって大きな精神的負担となることがうかがえる。経済的な問題のみならず、社会とのつながりを求めて仕事をする母親も多いようである。このあたりから、子育てと生きがいの両立、相克が問題となるが、これらについて言及した記述もある。

- ・(抜粋)子育てに専念した方がいいのではないかと思いつつも、仕事を続けている毎日。子供が大きくなって手を離れると、自分は何をしていたんだろう?と思いたくないという気持ちもある。
- ・(抜粋)長女の出産直前まで働いていた私がこんなに長く家にいるとは自分でも予想外でしたが、子供につき合ってきてよかったと思いつつ、そろそろ自分さがしを始めようと思っています。

##### b) 夫・家族への不満

子育て中の母親の精神衛生を保つ上で、また働く母親を支えるために、夫・家族の協力は不可欠であると思われるが、なかにはそのような

協力が得られない場合もある。

夫が子育てに悩んだ時、気持ちに理解がないのが不満。母親にもしんどい時があるのに…。一番の理解者でいてほしいのに！子供の味方はいても、私の味方はいない。

## 5 . まとめ

以上のように自由記述欄から、現代の子育ての困難さがどのようなものであるか、具体的なところが明らかになったのではないかと思う。

子育ては、特に初めての場合、悩みや苦勞の多いことである。親と子どもの性格やタイプの組み合わせによって、生じる問題や困難はさまざまであり、一様な解決策はない。このような点は、いつの時代にも普遍的な問題であっただろう。

しかし、現代に特有の問題もさまざまに存在する。

核家族化、少子化が進み、子育てに関する周囲の知恵が借りにくくなっていることと、母子の社会からの孤立がある。これにより、母親のストレスが高まり、子育ての環境が悪化するおそれがある。

子育てをめぐる価値観や考え方が多様化し、

情報を入手する手段も増えたので、何を選択すべきか迷う可能性も増加した。

生活様式や労働のあり方の幅が広がり、女性の社会進出、晩婚化が進んだ。しかし、出産後、子育て中であっても正社員並みの労働を求められ、職場の柔軟な対応はほとんどなされていない。託児施設もまだまだ充分であるとはいえない。また、社会の求める母親像は旧来のものと変わらない。

さらに、近年子どもの安全を守ることも保護者としての急務となっている。

自由記述欄への記述は、このようなことを教えてくれるものであった。

これらが、今後子育て支援を行なう上での参考に、また今後このような調査を行なう際の叩き台となれば幸いである。

最後に、子育て中の保護者から、他の保護者へのエールと思われるような記述があったので、これらを紹介して本章を終わりたい。

- ・(抜粋)子供と本気で向き合わなければ人間が育たないと思っています。
- ・(抜粋)子供が大きくなるのは本当に早いです。(中略)今子育て中のお母さん(特に兄弟姉妹をお持ちの)大変なこの状態はいつまでも続かないので、今を乗り切れればと思って頑張ってください。

## おわりに - 今後の研究に向けて

本調査は、今日の子育て環境と、保護者（主に乳幼児をもつ母親）の子育てに関する意識を探り、必要とされる支援は何かを考えるための資料を得ることを目的として行われました。その結果から顕著に見えてきたのは、以下のような点です。

### 1. 「子育てをする自分（保護者自身）」への2つの意識

今回新たに加えた、保護者自身の生き方に関する質問項目への回答から明らかになったのは、保護者（母親）の大部分が、「自分の生き方を大切にしたい」という意識と、「子育てにおいて自分が犠牲になるのは仕方がない」という意識を、同時に併せもっているということです。ここで「自分の生き方」という言葉を、「子育て以外」と理解した上で回答したと判断するならば、今日の母親は、相容れない、同時成立し得ない2つの構えを心の中に抱いていることとなります。このような両価的傾向は、他の質問項目への回答からもうかがえ、自分自身を生きることと、あるべき母親を生きることとの間で、葛藤するか、一方を意識しないようにしてやっていくかのいずれかを迫られている状況があると推察することができます。

### 2. 母子の閉塞感の構造

専業主婦か常勤職者にかかわらず、過半数の母親は子どもだけと過ごす長い時間を苦痛に感じていますが、その一方で、約3分の2の母親が、「子どもが小さい間は家事・育児に専念するのがよい」という意識をもっています。昨今の子育て支援において、「母子の孤立」「子育て者の閉塞感」の問題はつとに指摘されているところであり、親に代わる乳幼児保育施設の設置・拡充が進められていますが、本調査の結果を踏まえると、なかなか簡単にはその方策が効を奏さないであろうと考えられます。つまり、自分が犠牲になって家事・育児に専念することが、子どもの健全な成長につながると母親たちが意識している限り、子どもを預けて閉塞状況から脱することは否定的な意味をもち、保育施設を進んで利用する行動につながらないだろうということです。

子どもと母親が閉塞的な関係を長期に持続することの苦痛や弊害については、徐々に社会全体に認識されるようになっていきます。次に求められているのは、「母子が時々、別々の空間で過ごし、互いの言動に干渉しない」ことが、母子双方にとって健全な成長を保證するという意識を社会がもち、母親にも伝えていくことではないでしょうか。今後は母親への個別インタビューを実施し、本調査から見えてきたこれらの結果をさらに検討していきたいと思っています。今後とも、ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

甲南大学人間科学研究科 学術フロンティア「第2期子育て研究会」

甲南大人間科学科 助教授 穂 苺 千 恵

乳幼児をお持ちのお母さま及びご家族の方へ

## 〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査 アンケートご記入へのお願い

### \*このような調査です

このアンケートは、甲南大学人間科学研究所が文部科学省から助成を受けて展開している「学術フロンティア共同研究プロジェクト」の一環として実施するものです。第1回調査は2000年3～7月にかけて、阪神間およびその周辺に在住する乳幼児を育てている母親および家族2700人を対象に実施されました。

またその続編として、2001年には父親を対象に、2002年には祖母を対象とする調査を実施し、今日の子どもと家族が置かれている環境や、育児に対する考え方を知り、どのように子育てを支援していけばよいかを、現代人の心の危機という観点から学際的に探ってきました。



第1回調査から6年が経過しましたが、現在も子どもを取り巻く状況は刻々と変化しています。そこで、再び同じ地域で6歳までの乳幼児（未就学児）を子育て中の母親および家族の方を対象に、第2回調査を実施することになりました。

お忙しい中とは存じますが、どうかよろしくご協力くださいますようお願いいたします。

### \*ご記入について

1. 原則として無記名です。ただし、この調査に関連したインタビューにお応えいただける方は、最終頁に必要事項をご記入ください。
2. あてはまる番号を○で囲み、回答欄の( )や□には具体的な数字や言葉をご記入ください。
3. このアンケートは、0～6歳（就学前）のお子様がいいらっしゃる方を対象としています。質問によって答えにくいものもあるかもしれませんが、あまり深く考え込まずにお答えください。
4. お母様以外の方がお答えになる場合、答えにくい項目については、とばしていただいて結構です。
5. このアンケートは、必ずアンケート用紙をもらってきたお子様についてお答えください。きょうだいでお持ち帰りになった場合は、どなたかお一人のお子様について結構です。お二人以上についてご回答くださる場合は、お一人のお子様につき一部の用紙をご使用ください。

### \*アンケートのご返送は、6月30日(必着)までをお願いします

### \*研究以外の目的には使用しません

お書きいただいた内容は、すべて統計的に処理し、研究以外の目的に使用することはありませんし、お子様やご家族にご迷惑がかかることは一切ありません。どうぞありのままをお答えください。

調査実施者 甲南大学人間科学研究所 第2期子育て研究会 代表：高石恭子（文学部教授）  
問い合わせ先 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1  
Tel/Fax 078-435-2683  
E-mail kihs@center.konan-u.ac.jp



子育てをされているあなたの気持ちや状況についておたずねします。

15. 子育ての状況とあなたの気持ちについて、最も近いと思われる番号に一つだけ○をつけて下さい。

	非常に そう	まあまあ そう	あまりそう ではない	ぜんぜん そうではない
1) 毎日の子育てが楽しい	1	2	3	4
2) 子どもの成長している姿をみるのが 嬉しい	1	2	3	4
3) 自分の生き方も大切にしたい	1	2	3	4
4) 自分は子育てに向いていない	1	2	3	4
5) 子育てを通して、自分の世界や視野が 広がった	1	2	3	4
6) 子育てのために、自分が犠牲になるのは 仕方がない	1	2	3	4
7) 子どもに愛情を感じている	1	2	3	4
8) 現在の毎日の生活に満足していない	1	2	3	4
9) 子育てにおいて、息抜きはできている	1	2	3	4
10) もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい	1	2	3	4
11) 良い親であろうとして無理をしている	1	2	3	4
12) 一日中、子どもだけを相手にして過ごす のは苦痛である	1	2	3	4
13) 経済的な必要がなければ、子どもが小さ い間、母親は仕事をせずに家にいた方が いい	1	2	3	4
14) 子どもが小さい間は、家事・育児に 専念したい	1	2	3	4
15) 家事・育児以外に自分の仕事を持って いたい	1	2	3	4
16) 子育てを通して、自分も成長して いきたい	1	2	3	4
17) 家事・育児だけでは物足りない	1	2	3	4
18) 今の生活（家事と育児に専念する/ 仕事と育児をしている）は自分らしい	1	2	3	4

16. あなたは普段の生活のなかで、以下のことがどれぐらいありましたか。最も近いと思われる番号に一つだけ○をつけて下さい。

	よく ある	ときどき ある	あまり ない	めったに ない
1) 子どもを育てることに張り詰めた緊張を感じたことがある	1	2	3	4
2) 子どもが泣いても世話をする気にならなかったことがある	1	2	3	4
3) 子どもがいなければいいと思ったことがある	1	2	3	4
4) 子どもの排泄のしつけについて困ったり悩んだりしたことがある	1	2	3	4
5) 子どもがよく寝ないことや夜泣きについて困ったり悩んだりしたことがある	1	2	3	4
6) 子どもがだだをこねたり、我(か)が強いことで困ったり悩んだりしたことがある	1	2	3	4
7) 子どもを叩きたいと思ったことがある	1	2	3	4
8) 実際に子どもを叩いたことがある	1	2	3	4
9) 子どものことばの発達について気になったことがある	1	2	3	4
10) 子どもが育てにくい子だと感じて悩んだことがある	1	2	3	4
11) 子どもと相性が悪いのではないかと悩んだことがある	1	2	3	4
12) 子どもがよく病気やけがをするので困ったり悩んだりしたことがある	1	2	3	4
13) 近所に子どもを遊ばせるところがなくて困ったことがある	1	2	3	4
14) 近所に子育てについて話し合える人がいなくて困ったことがある	1	2	3	4
15) 近所の人に子どもを比べられて悩んだりしたことがある	1	2	3	4
16) 子育てについて友人と話したりすることがある	1	2	3	4
17) 子育てについて友人に話してほっとしたことがある	1	2	3	4

ここからの質問については、お子様のお母様のみお答え下さい

(お母様以外の方は 7 ページ へ進んでください)。

17. 子育てについての不安を話せる相手がありますか。どちらかの番号に○をつけて下さい。

(1) はい (2) いいえ

▶ 「はい」と答えられた方におたずねします。

話せる相手について、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- ① 配偶者 ② 自分の両親 ③ 配偶者の両親 ④ 自分、または配偶者のきょうだい⑤  
子育てを通じて知り合った友人 ⑥ ⑤以外の友人 ⑦ 園の先生  
⑧ 医師・保健師などの専門家 ⑨ その他 (具体的に: )

18. お答えいただいているお子さんの妊娠・出産・育児について、必要な情報を得たいとき、とくに頼りになったものはどれですか。頼りになったと思う順に3つまで選び、番号に○をつけて下さい。

- ① 自分の母親 ② 配偶者の母親 ③ それ以外の家族・親族 (具体的に )  
④ 友人 ⑤ 近隣の子育て経験者 ⑥ 園の先生・医師・保健師などの専門家  
⑦ 公的な冊子 (例: 母子手帳、保健所での配布物) ⑧ 専門家の書いた育児書  
⑨ 出産・育児雑誌 ⑩ 育児マンガ、小説家・漫画家等の書いた育児体験記、エッセイ等  
⑪ インターネット上の子育て支援サイトやブログ ⑫ その他 ( )

19. 上記の⑦~⑫について、頼りになったと回答されたもののうち、具体名(書名、サイト名等)が思い出せるものがあれば、いくつでも結構ですのでご記入ください。

〔例〕 ⑨: 「〇〇」 △△著 ××出版社

子どもを預ける(みてもらう)ことについておたずねします。

20. 通常の通所通園以外で子どもを預けたいと思うことがありますか。

① はい ② いいえ

21. 通常の通所通園以外で、お子様を預けることがあるのはどのような場所ですか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- ① 幼稚園・保育園の延長保育 ② 自分の実家 ③ 配偶者の実家 ④ 友達の家  
⑤ 民間の託児所 ⑥ その他(具体的に: ) ⑦ 預けるところがない

22. どういうときに預けますか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- ① 仕事 ② 病院へ行くとき ③ 買い物に行くとき  
④ 自分がリフレッシュするための時間をもつため ⑤ その他(具体的に: )

23. 子どもを預けることにためらいがありますか。

- ① はい      ② いいえ

➡ 「はい」と答えられた方におたずねします。

その理由について、最もあてはまると思われる番号に一つだけ○をつけて下さい。

- ① 子どものことが心配だから      ② 親がいつも一緒にいた方がいいから  
 ③ できるだけ子どものそばにいたいから      ④ 安心して預けられる場所がないから  
 ⑤ その他（具体的に： \_\_\_\_\_ )

**父親の子育て参加についておたずねします。**

24. 普段の生活のなかで、夫(お子様の父親)は子育てにどのように参加していますか。また、お子様やあなたご自身との関係についておたずねします。最もあてはまると思われる番号に一つだけ○をつけて下さい。

	非常に そう	まあまあ そう	あまり そうではない	ぜんぜん そうではない
1) 夫は子育てに協力的である	1	2	3	4
2) 夫が子どもと一緒に過ごす時間は十分である	1	2	3	4
3) 夫は子どもを可愛がっている	1	2	3	4
4) 夫は家事をしない	1	2	3	4
5) 夫は子どもの世話をする	1	2	3	4
6) 夫は子どもに対して甘い	1	2	3	4
7) 夫は、子どもが小さい間、妻は仕事をせずに家にいてほしいと思っている	1	2	3	4
8) 夫婦でよく子どもの話をする	1	2	3	4
9) 夫は、あなたの関心事や悩みなど、現在のあなたご自身を理解してくれている	1	2	3	4
10) ふだんから夫婦で、お互いの関心事について話し合っている	1	2	3	4
11) 子育てについて自分が感じている不安などを聞いてくれる	1	2	3	4

[すべての方へ] 下の絵を見てお答えください。

1) 場面1

左にいる子どもが右にいる親に何か訴えている場面です。

親はなんと言うでしょう。親が言うと思われる言葉を空いている四角い枠の中に書き込んでください。



2) 場面2

二人の子どもがぬいぐるみを取りあっている場面です。

二人の子どものうち、左側の子どもは画面右にいる大人の子どものです。大人(親)はなんと言うでしょう。親が言うと思われる言葉を空いている四角い枠の中に書き込んでください。子どもは左側(親の子ども)が「A」、右側が「B」という名前です。



最終ページに自由記述欄があります。

[すべての方へ] お差し支えなければ、日頃子育てについて感じたり考えたりされていることを自由にご記入ください。

### 個別インタビューへのご協力をお願い

本調査用紙による研究に加えて、子育てに関して個別インタビューにに応じてくださる保護者の方を募集します。できるだけ皆さまの子育てに対する生の声をうかがっていきたいと考えています。

インタビューにご協力いただける方は、ご都合のよい連絡先を以下にご記入ください。後日こちらから連絡をさせていただくことがあるかもしれませんが、その際はご協力をよろしくお願い申し上げます。

氏名 \_\_\_\_\_

電話番号 \_\_\_\_\_

メールアドレス \_\_\_\_\_ @ \_\_\_\_\_

お書きいただいた個人情報は、インタビューについての連絡以外の目的に使用することはありません。

お忙しい中、ご協力いただきましてありがとうございました。



## 第2期子育て研究会メンバー一覧

- 代表 高石 恭子 ( 甲南大学文学部教授・学生相談室・ )<sup>\*</sup>  
臨床心理士
- 穂苅 千恵 ( 甲南大学文学部人間科学科助教授・ )<sup>\*</sup>  
臨床心理士
- 中里 英樹 ( 甲南大学文学部社会学科助教授 )
- 新道 賢一 ( 甲南大学心理臨床カウンセリングルーム・ )<sup>\*</sup>  
臨床心理士
- 仁木 智子 ( 甲南大学心理臨床カウンセリングルーム・ )<sup>\*</sup>  
臨床心理士
- 大島 博子 ( 新川医院・臨床心理士 )
- 岡田 尚子 ( 甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻・ )  
臨床心理士
- 甲斐 暁子 ( 甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻・ )  
臨床心理士
- 小林由美子 ( 甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻 )
- 松本 歩 ( 甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻 )

<sup>\*</sup> は人間科学研究所兼任研究員

